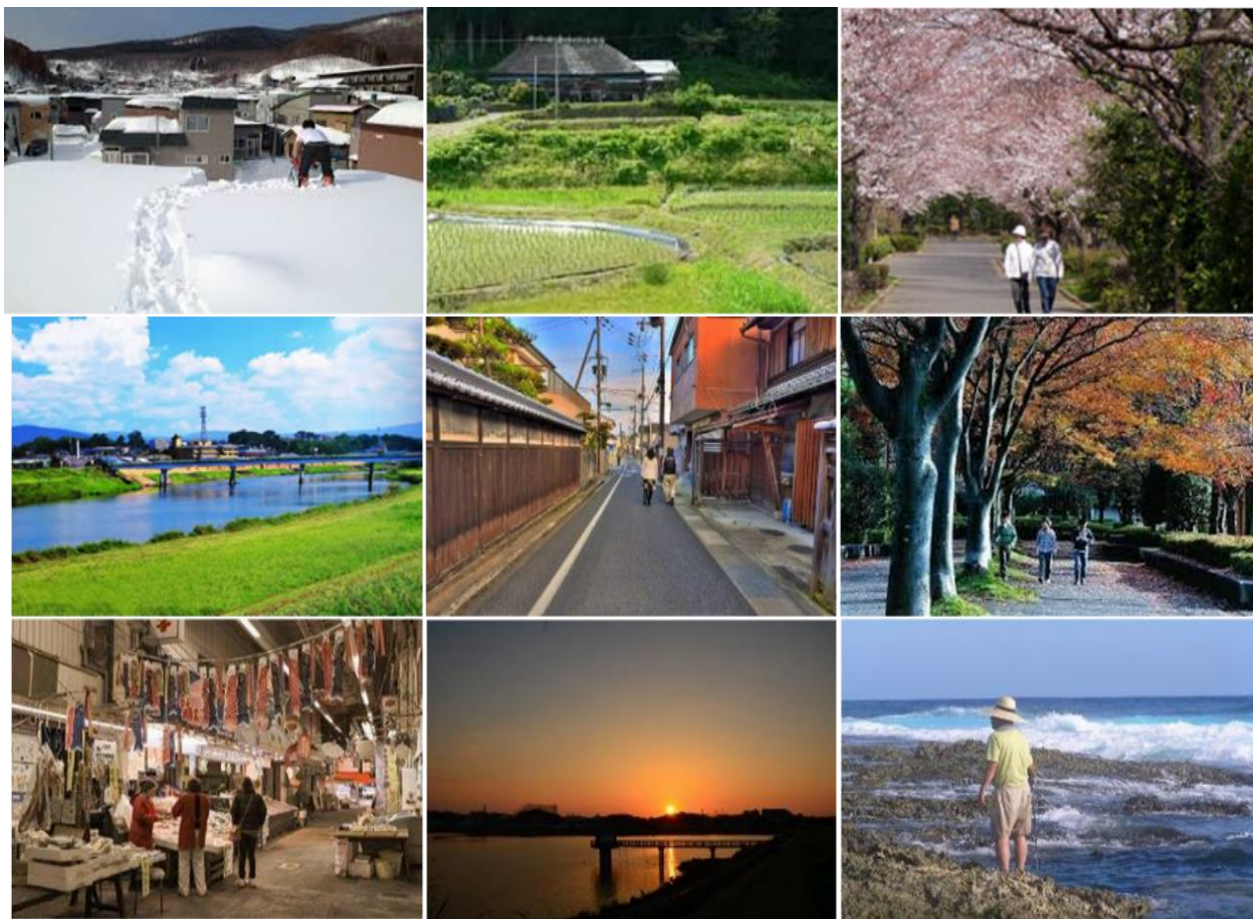


見守り・SOS体制づくり 基本パッケージ・ガイド

認知症の人等が行方不明にならずに外出を続けられるための
見守り・SOS体制づくりの一步一步



社会福祉法人 浴風会
認知症介護研究・研修東京センター



行きたいところがある。会いたい人がいる。
認知症になっても、安心して外出ができ
無事に家に戻ってこられる、わがまちに

わがまちならではの、見守り・SOS体制を、
一歩一歩、つくっていかう

目 次

I. 見守り・SOS体制づくり基本パッケージの概要と活かし方

1. 基本パッケージ・ガイドのねらい	1
参考① 認知症高齢者の行方不明者数の推移	2
参考② 行方不明の解消に向けた取組の歩み	2
2. 用語の定義	3
3. 見守り・SOS体制づくりの基本指針と全体構造	4
4. 基本パッケージの構成と活かし方	7

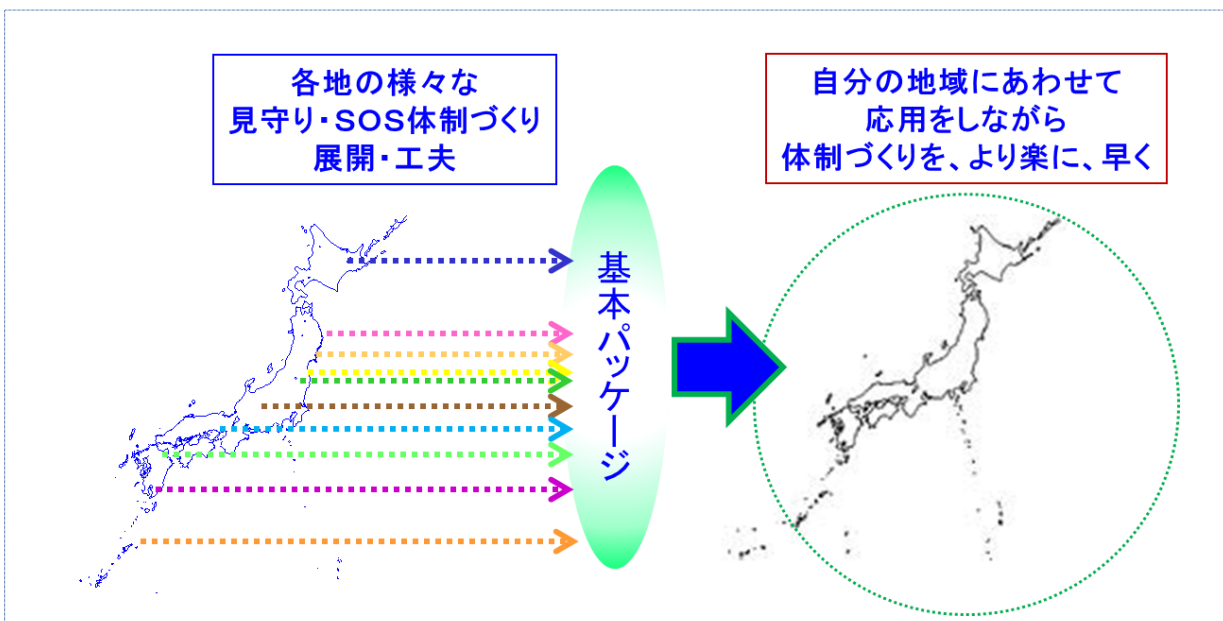
II. 見守り・SOS体制づくりの一步一步

1. まずは基本方針・全体構造をもとに見直そう	9
2. 基盤づくりをしっかりと	11
1) 地元の本人・家族の声を聴く	13
2) 統計の整備・実態の把握と共有	15
3) 事務局と推進コアチームをつくる	17
4) ビジョン、共通方針の共有	19
5) 言葉・用語の見直しと配慮	21
6) アクションミーティング：立場を超えて話し合い一緒にできることを考える	23
7) 仲間を増やす：領域や世代を超えて	25
3. 見守り・SOS体制づくりのアクションの展開	27
1) 広報・啓発：みんなが自分事として考え一緒に作る意識を高める	29
2) 事前登録システム：本人・家族が備える	31
3) 個別支援ネットワーク：「その一人」を地域で支え合う	33
4) 支援者登録システム：地域みんなが見守り手になる	35
5) 地域支援ネットワーク：地域の多資源のつながりを育てる	37
6) SOSネットワーク：SOS時にみんなで動く：SOSネットワーク	39
7) 模擬訓練：備えて機動力を高める	41
8) アフターサポートシステム：	
行方不明発生後の本人・家族のダメージの緩和と再発防止	43

I. 見守り・SOS体制づくり基本パッケージの概要と活かし方

1. 基本パッケージ・ガイドのねらい

- ◆年々、認知症高齢者の行方不明者数が増加しています。警察庁の統計によると、その数、2016年は年間15,432人。その内、死亡発見が471人、未発見が171人に上っています。行方不明を防ぎ、安心して外出できる地域をつくっていくことは、すべての自治体にとって重要な課題です。
- ◆そのためのアプローチとして、国内初のSOSネットワークが発足したのが1994年（北海道釧路地域）。それからすでに25年近くが経ち、この間、全国各地で様々な試行錯誤が積み上げられ、取組の範囲や内容が、年々、拡充してきています。
- ◆一方で、それらの全体像は見えにくく、各地で積み上げられてきた取組の成果や工夫を、十分には活かしあえていません。
- ◆「どの地域でも、先行地域のポイントを参考に、よりよい体制づくりを速やかに」
- ◆そのために作られたのが、この冊子で紹介する「基本パッケージ」です。先行地域の取組情報をもとに、見守り・SOS体制づくりの全体像を整理し、取組のエッセンスをまとめたものです。この冊子は、基本パッケージをそれぞれの自治体が活用しながらよりスムーズに、少しでも早く、見守り・SOS体制を築いていけるための解説をつけたガイドです。



どこに住んでいても、外出を楽しめ、無事に家に戻ってこられる地域に

参考①

認知症高齢者の行方不明者数の推移

- ・下記のデータは、警察庁が2012年から毎年公表するようになった数値です。
 - ・あくまでも、「行方不明の届があり」、「警察に受理された数」です。
 - ・65歳以上の数であり、65歳未満は含まれていない数です。
- *自治体の取組では、若年性認知症の人も含めた把握が必要です。

認知症高齢者の行方不明届の受理人数*

(警察調べ)

(人)

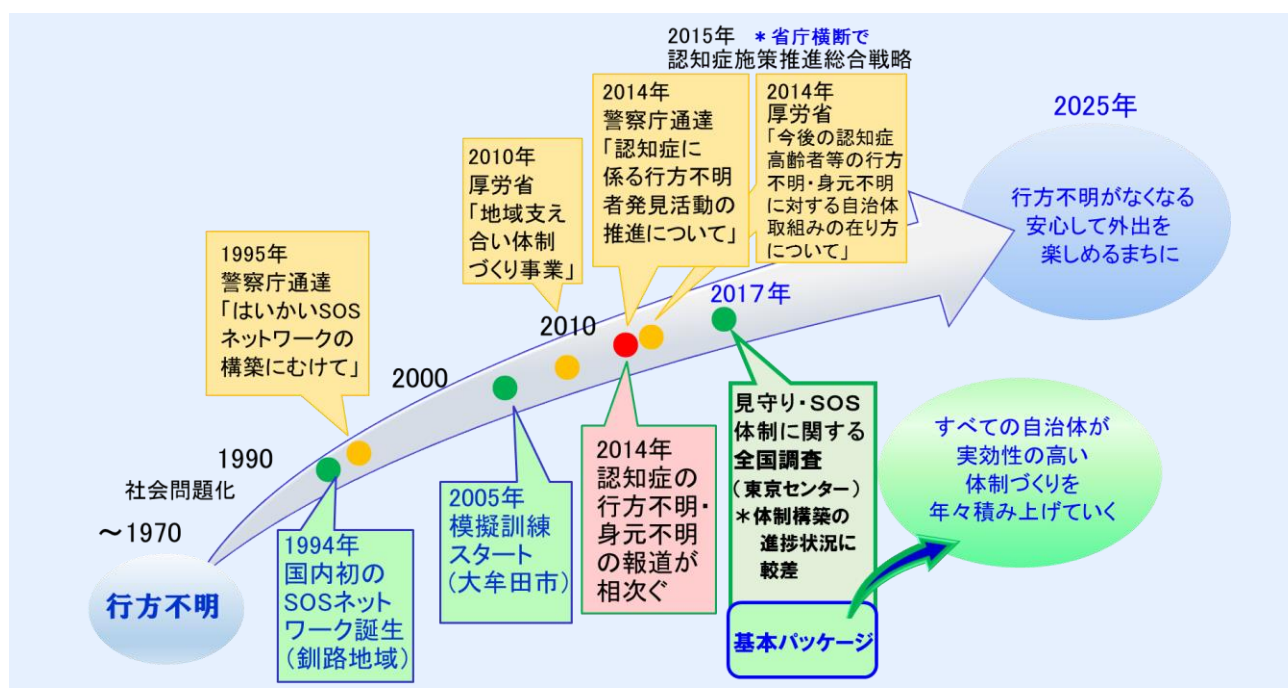
	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年
受理人数*	9,607	10,322	10,763	12,208	15,432
(内訳)					
無事発見	9,040	9,776	10,166	11,579	14,770
死亡発見	359	388	429	479	471
所在不明	208	158	168	150	191

*受理人数：警察に届け出て、受理された人数

参考②

行方不明の解消に向けた取組の歩み

- *認知症の人等の行方不明は、1970年頃から社会問題化した「古くからの課題」です。
- *一方、急激に進む少子高齢化や地域社会の変化の中で、「行方不明」の発生状況や、アプローチのあり方も変化してきており、常に「新しい課題」をはらんでいます。
- *これまで積み上げられてきた取組を大切に活かしつつ、これからの自治体において、いかに行方不明の解消を図っていくか、中長期の視野にたった取組が不可欠です。



2. 用語の定義

この基本パッケージ・ガイドにおいては、行方不明を最大限に防いでいくことをねらいとして、下記の用語を、右欄のように操作的に定義して用いることとします。

用 語	定 義
認知症の人等	・ 認知症の診断を受けた人、および認知症の疑いがある人を含む。 ＊ 行方不明者の中には、診断を受けていない人、認知症の疑いのある人が少なくないため ・ 65歳未満の人も含む。
本人	・ 「認知症の人等」と同義。
地域の人	・ 地域で暮らしている人、働いている人すべて。 ・ 医療や介護等の専門職、企業の人も含む。
見守り・SOS体制	・ 認知症の人等が行方不明になることを防ぎ、万が一 行方不明が発生した際に無事に家に戻れ、安心して外出を続けられるようになるための以下の一連の機能を統合した体制をいう。 ① 本人の普段の暮らしを見守る機能 ② 本人が行方不明になった時（SOS時）、関係者が協働していち早く発見し、自宅や施設等に無事に帰る支援をする機能 ③ 行方不明による本人と家族のダメージを緩和する支援を行うとともに、再発を防ぐための支援を行うアフターサポート機能 ・ 略して「体制」と記すこともある。
見守り・SOS体制づくり基本パッケージ	・ 見守り・SOS体制づくりを各自治体が円滑に進めていくための参考資料として、取組の先行地域の取組情報等をもとに、下記をひとつにまとめたもの。 ① 体制づくりに必要な一連の取組を体系的に整理した全体構造 ② 実効性の高い体制を築くための基本指針 ③ 体制作りに必要な各取組項目の内容・ポイント、参考例等 ・ 略して「基本パッケージ」と記すこともある。

「徘徊」という語を、本冊子では基本的に用いません。

★理由：①誤解や偏見をなくするため

②改善策を具体的に見出していくため

本人は「目的もなくウロウロ彷徨っている（徘徊）」のではなく、何らかの目的があって歩いています。「徘徊」という語を使うと認知症の人に関する誤解や偏見を助長してしまいかねません。また、徘徊で一括りに説明してしまうと、行方不明がなぜ起きているかという背景や改善策の検討が具体的に進みにくくなります。

※参考例として掲載する自治体のネットワークの名称等で「徘徊」を使用している場合は、そのままの表記を記しています。

3. 見守り・SOS体制づくりの基本指針と全体構造

体制づくりが、
年々進んでいる地域に
みられる共通点です。

基本指針：体制づくりを進める上で大切にしたいこと

1. 本人視点・実効性：日々切に暮らす本人の視点で、役に立つ活きた体制をつくる

- ◆誰のために何をを目指すか、ビジョンと目的を大切に（見失わない）。
*本人が希望をもって、地域の中でより良い日々を過ごしていけるように。
- ◆「本人はどうか」。本人の視点にたちながら、本人につながり、役立つ取組を。

2. 共創と協働：行政と地域の多様な人が方向性と力を合わせて、一緒につくりだす

- ◆行政と地域の多様な立場や職種の人たちが、一緒に話し合いながら。
*行政だけで進めない。
- ◆本人と一緒に話し合いながら（をあたりまえに）。
- ◆方針を一つにしなが、一緒につくる、一緒に動く。

3. 全体性と連動性：取組の全体像に視野を広げ、関連する取組と連動させながら

- ◆体制の全体をみながら。
*全体の一部だけみて進めない。そこをこなすことを目的にしない。
- ◆他の取組や施策、事業とつなげて、相互に発展させていく。

4. 小さく始めて、息長く育てる：できることから、即動き、持続発展を

- ◆今できることから、とにかく一歩を踏み出す。
- ◆動きながら糸口を見つけて、先へ進む。
*先送りしない（今、切実に暮らしている人がいる）。
- ◆とにかく、続ける。改善を続けながら、年々、少しでもよりよく。
*形骸化させない、途絶えさせない。

5. よそをみて、よそとつながり、お互いが活かし合う：他地域との交流、相互に発展

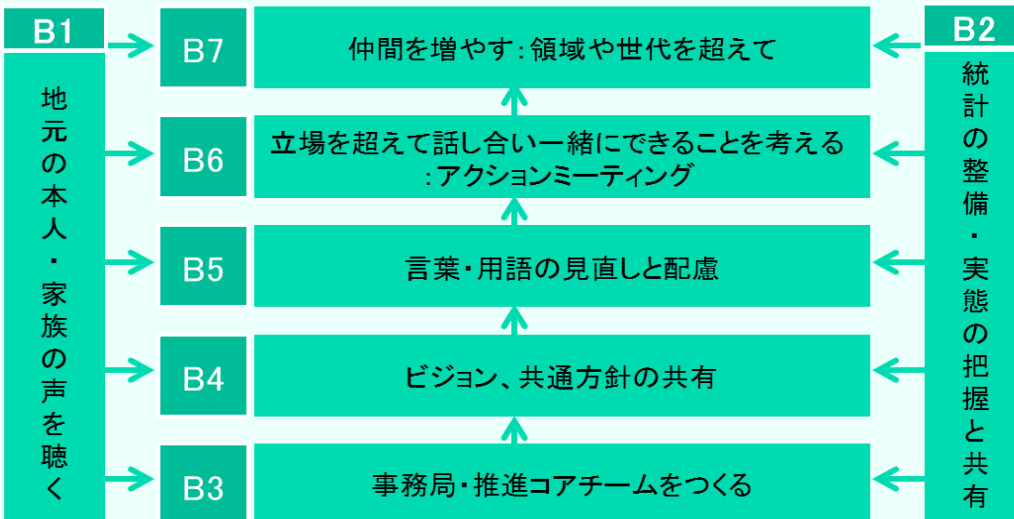
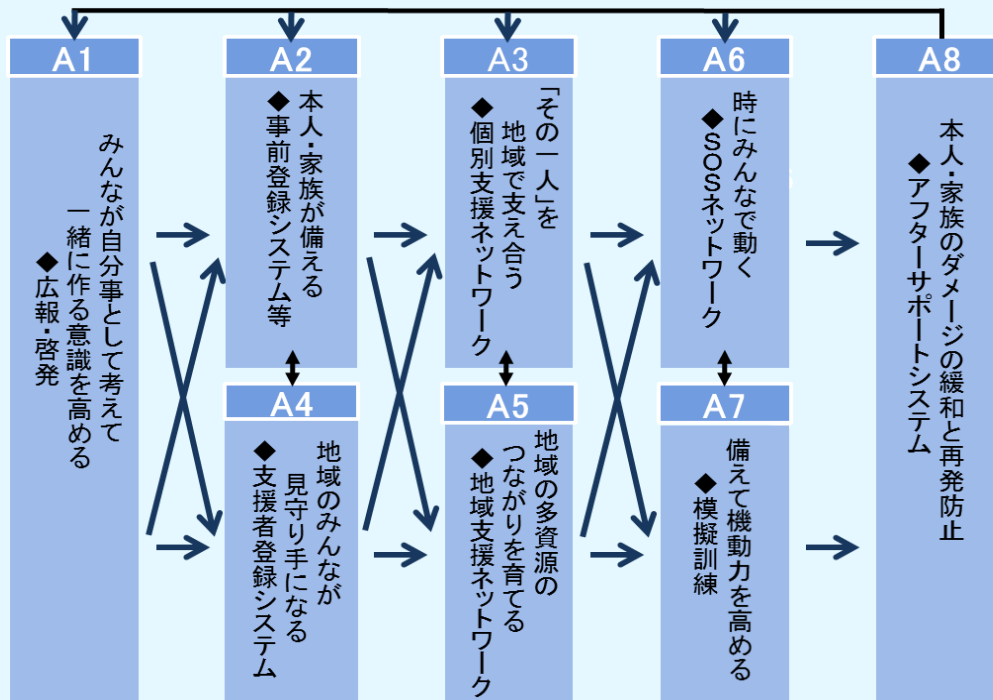
- ◆都道府県内、そして全国の他市町村の動きにアンテナをはる。つながって交流を。
*自地域内だけで、よしとしない。
- ◆役立つモノは、どんどん真似る（無駄な苦勞をしないで、楽をする）。応用していく。
- ◆他地域を知ること、自分の地域の良さにも気づく。
- ◆互いの工夫・成果、苦勞や失敗を分かち合い、一緒に体制作りを加速させる。

全国各地で
取り組まれている
ことの全体像です。

見守り・SOS体制づくりの全体構造

A. 見守り・SOS体制づくりのアクション

各アクションの連鎖と循環を生み出す



B. 基盤づくり

見守り・SOS体制を地域全体でつくりだし、持続発展していく基盤をつくる

全体構造の5つの特徴

特徴① 様々な取組の総体としての全体構造

- ・現在、認知症の人等の普段からの見守りや、いざ行方不明になった時のための体制づくりとして、様々な取組が行われています。
- ・それらをバラバラにしておかず、「見守り・SOS体制」としてひとつにまとめ、その全体の中のひとつひとつの要素（取組）として位置づけた構造となっています。

特徴② 「A. 体制づくりのアクション」とその土台の「B. 基盤づくり」

- ・体制づくりのための直接的な取組として、「A1. 広報・啓発」～「A8. アフターサポートシステム」までの一連の取組（アクションA）があります。
自治体がこれまで着手し力を入れてきているのは、これらA（の一部）が多い状況がみられます。
- ・一方、それらの取組がスムーズに進み、かつ長続きしながら徐々に広がりながら効果をあげていくためには、アクションの基盤作り（図のB1～B7）が非常に重要です。

*** 先行地域が共通して力をいれているのが、この基盤づくりです。**

特徴③ 単発ではなく、つながりや循環を図りながら発展

- ・図のA1～A8、そしてB1～B7は、一つ一つが体制づくりの大事な取組です。
- ・一方、それらを単発で考えたり実施していると、取組や事業がバラバラに増えていくばかりで、担当者・関係者の負荷が増す一方です。その割には体制としての全体のまとまりやつながりが育っていきません。
- ・一つの取組をする際は、必ず、他の取組につなげ、取り組んで生まれた成果や課題を他の取組に活かしながら、体制全体の発展を図っていく流れが大切です。

特徴④ 入口はどこからでも：自治体の現状や課題に応じて

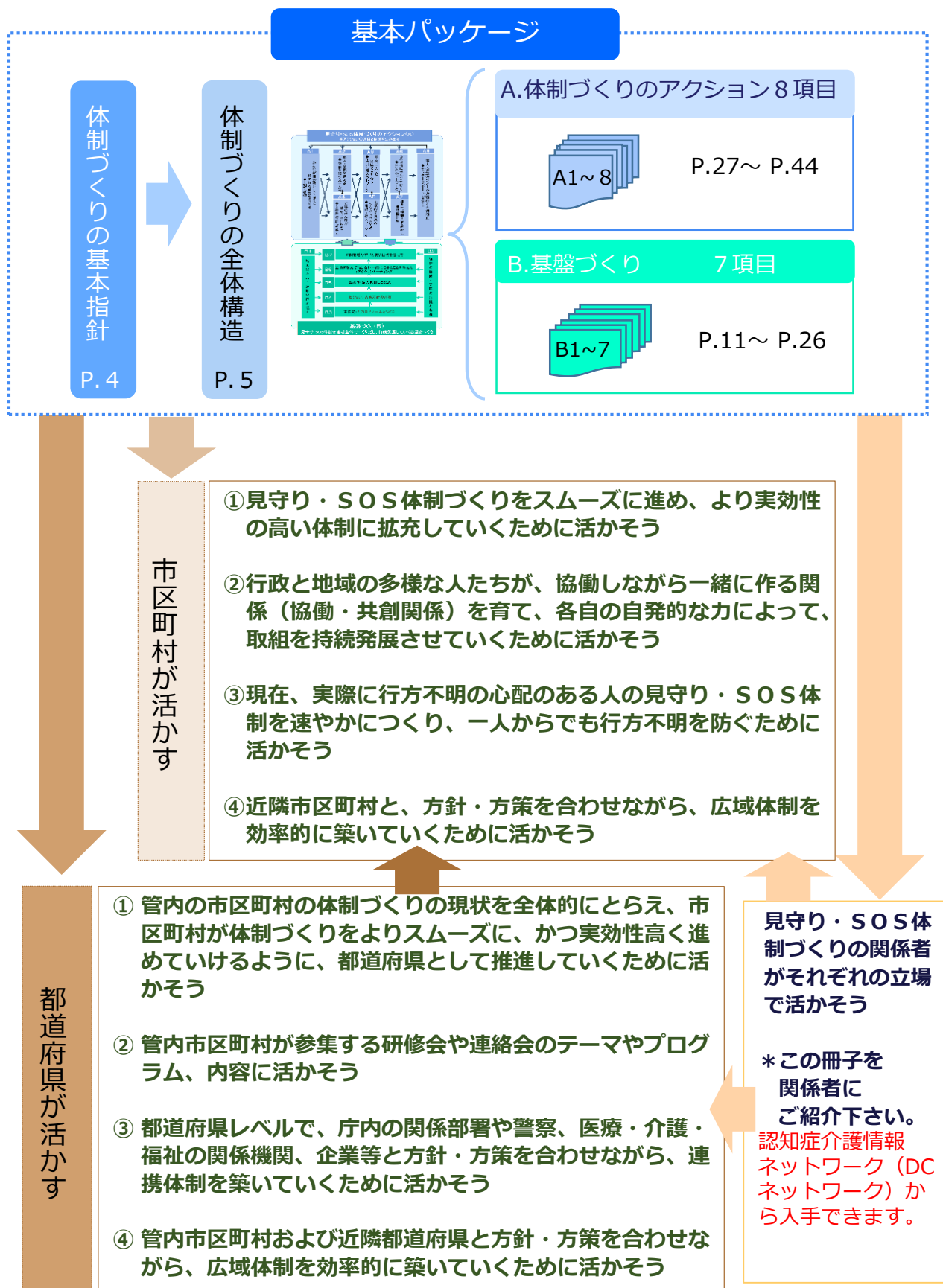
- ・この全体構造は、体制づくりをよりスムーズに、そして実効性を高めていくための構造を示したものです。「A. 体制づくりのアクション」、「B. 基盤づくり」は、それぞれA1、B1から順番にステップを刻んでいくことが望まれます。
- ・一方、順番に縛られすぎずに、各自治体で今優先すべき課題に関する取組や、すでに進めつつある取組、あるいはやりやすい取組など、どこからでも「まずは始める」ことが肝心です。入口はどこからであっても、他の取組へ必ずつなげながら、全体的な体制の整備へと歩を進めていきましょう。

特徴⑤ B6. アクションミーティングを、全体のエンジンとして

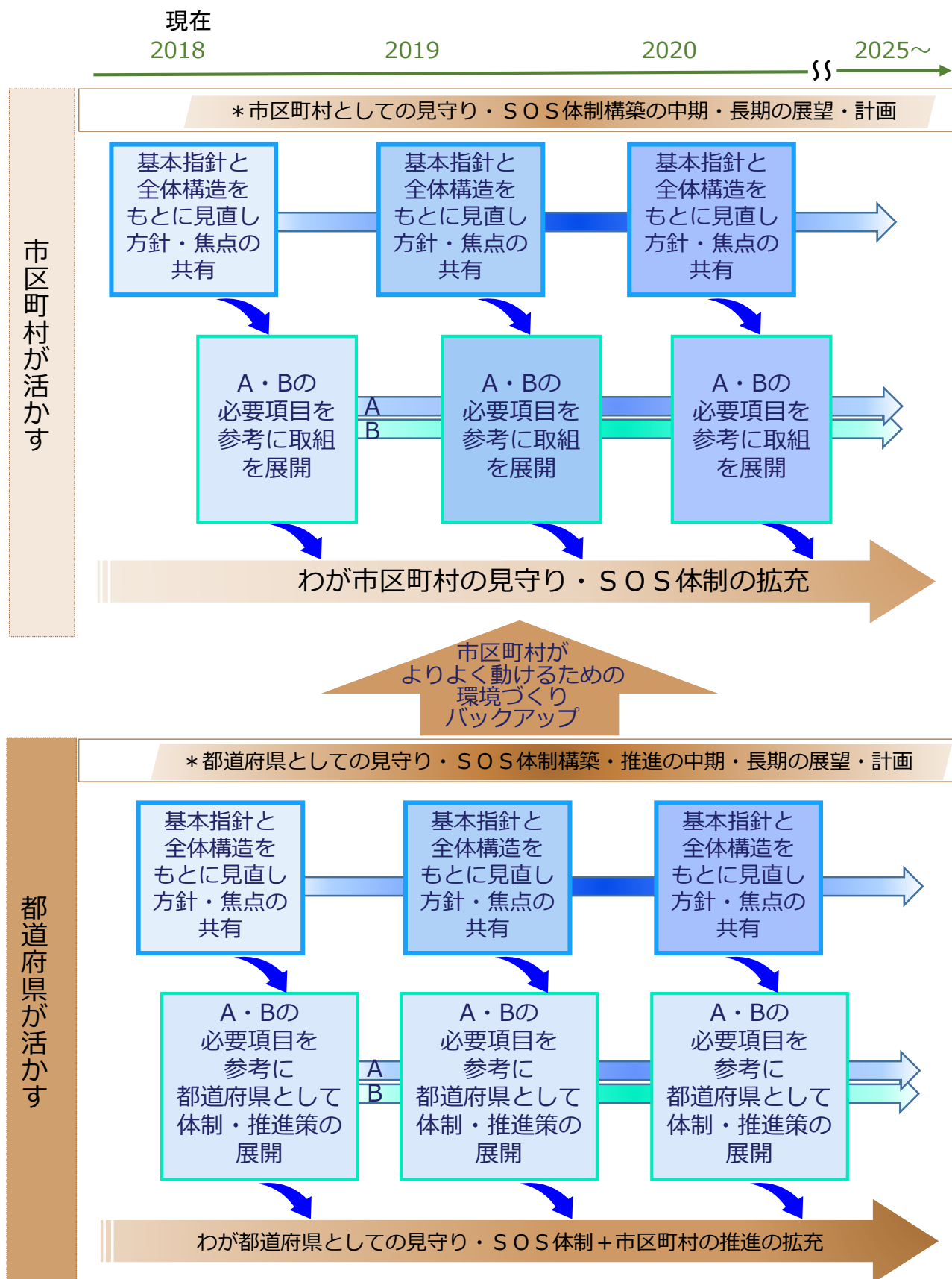
- ・見守り・SOS体制づくりは、多種多様な人たちや組織等との方向性合わせや合意形成が必要であり、一緒に力を合わせて協働しつつ、各自が自発的に動くことが重要です。
- ・それらを生み出し、体制づくり全体を活発に展開していくために重要な機能をはたすのが、「アクションミーティング」です。
- ・この全体構造の中では、基盤づくりのB6に「アクションミーティング」（p.23～24）があり、体制づくり全体を効率的に進めるための原動力（エンジン）となります。

4. 基本パッケージの構成と活かし方

- ◆基本パッケージは、見守り・SOS体制づくりを進めていくための「基本指針」+「全体構造」+「AとBの各項目の内容、ポイント、参考例」がワンセットになったものです。
- ◆市区町村、そして都道府県、そして関係者がそれぞれの立場で活かしていきましょう。



あるものを大切に、年々、一步一步、体制の拡充を図っていこう
～基本パッケージを活かしながら～



II. 見守り・SOS体制づくりの一步一步



1. まずは基本指針・全体構造をもとに見直そう： 方針と焦点の共有へ

ねらい

- 1) 取り組む前に、自分の自治体の今、そしてこれまでどんな取組がなされてきたかまず知ることからはじめましょう。
- 2) 基本指針と全体構造を参考にしながら、これまでどんな方針で、何がどこまで進んできているか確認してみましょう。
- 3) それをもとに今後の体制づくりの方針と焦点について話し合い、共有しましょう。

メリット・期待されること

◆地域のチカラの（再）発見

まだやれていない、進んでいないと思っていても既に取り組まれていることがあったり、熱心に動いている人がいたり等が、（再）発見できる。

◆今後の方針や必要なことが、浮かびあがる

指針や全体構造に照らし合わせてみると、自分の地域での今後の方針や注力すべきことが浮んでくる。視覚化しながら、話しやすくなる。

◆マンネリ化や形骸化を防ぐ一歩になる

ステップ

1) よく知ろう

- 現在の見守り・SOS体制作りに関して取り組まれていること、内容や関係者を確認してみよう。
- 過去にさかのぼり、関連の取組について調べてみよう。

2) 基本指針と全体構造を参考に、整理を

- 現在の取組で共有されている方針があるか、あればどのようなものかを確認しよう。
- 現在やこれまでの取組が、全体構造に照らすと、どの部分にあたるのか、全体図にマークしたり、書き込んでみよう。
- それぞれの取組間のつながりがあるか、あるものは線で結ぼう。
- 現在、そしてこれまでに体制づくりに関係してきている人、組織等を一覧にしてみよう。

3) 今後の方針や焦点を話し合い、共有を

- 以上を担当者・関係者で一緒に見ながら自分の自治体として、今後重視や補強していきたい方針を話し合い、共有しよう。
- 自治体としてどこに注力すべきか、どこから取り組むことが、本人により役立ち、波及効果を期待できるかを話し合い取組の焦点を共有しよう。

ポイント

- ◆一人だけ、いつものメンバーだけでなく関係者に声をかけ一緒にやってみよう。
- ◆自分の部署だけでなく他の部署や関係者にも聞いてみよう。
- ◆短時間集中的にやるのが効果的。
ある期間内で集められた情報をもとに「見直す」ことに時間を使おう。
- ◆書面や文言にとらわれすぎずに、実際にどのような方針を大事にしてきたか、率直に話しあってみよう。
- ◆情報や気づきを、全体構造にあてはめて整理していくと、現在の取組の全体像、今後必要な取組等を明確にしやすい。
- ◆各取組の確認にとどめずに、取組と取組の間のつながりや流れを確認しよう。
- ◆自治体の現状や問題等にとらわれすぎずに基本指針・全体構造にそって、「これから一歩ずつよりよくしていくため」に方針や焦点を話し合おう。
- ◆参加者それぞれの立場での気づきやアイデアを率直に出し合おう。
- ◆最終的に、方針や取組を決める時は、本人の視点にたって考えよう。

実例① 見直してみたら、休眠・廃止された重要な取組があることを発見！

「行方不明のことを、そろそろ何かしなければ・・・」。そう考えた市の認知症施策の担当者が、基本パッケージの「全体構造」を目にして、現在そして、過去の地域の取組を探ってみた。

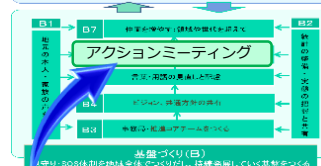
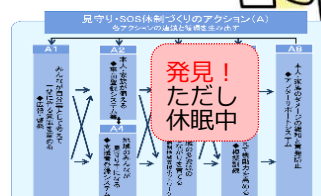
課内だけではなく、町づくりの中心になっている他の部署に尋ねてみたところ・・・

10年近く前に見守りとSOS時の対応を一体化した立派なネットワークが作られていたことを発見！最初だけでその後休眠しており、そのための会議体はすでに廃止されていた。



どこから手をつけたらいいんだろう？

まずは全体構造を見ながら、地域にあるものを探してみよう



話し合うことから始めよう



抱え込まないで地域の人たちと一緒につくっていきましょう

「ゼロからではなく、すでにあったこのネットワークを再起動しよう」

「急がないで、二度と休眠しないよう、埋もれていたことを地域の人たちにも伝えて、担当者が変わっても長続きするように、地域の人たちと企画段階から話し合っていこう」→こうした方針が話し合われ、B6. アクションミーティングから取組をスタートさせていくことが課内で共有された。

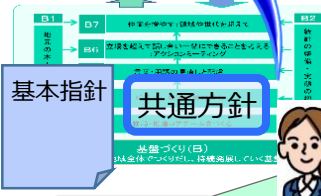
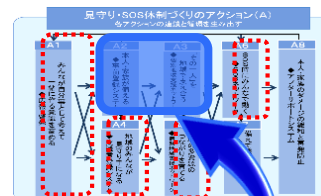
実例② いろいろやって盛り上がったがそこ止まり・・・ワケがみえた

「いろいろやって、支援者が増えたり、ネットワークが盛り上がったたりしたが、そこどまり。次を悩んでいた。地域の人たちからも、次をどうするのか」と言われていた。

そんな時、基本パッケージを知って、全体構造で確認したら本人支援、そしてB. 基盤づくりがすっぽり抜けていたことに気づいた。何より基本指針を目にして、はっとした。「本人視点・実効性」が欠けていた。言葉では「やさしい町に」と言っていたけど、誰のための、何のためなのか。そもそも担当者間や課内でさえ方針が明確になっていなかった。

担当者そして包括の人たち、そして課長や補佐も含めて、これからどういう方針でやって行くのか、話し合いを重ねた。思い思いのことを話してみたら、みんなやるのが負担でこなすことで必死。何のためか、あいまいなまま走っていた。

これからは、本人の視点に立とう、今できてきている支援の輪と本人をしっかりつないでいく個別支援に力を入れていこう、こうした方針を地域の人にもしっかり伝えていこう、ということで一致。「本人視点でいこう」と課内の結束力が強くなった。仕事がやりやすくなった。



あたりまえのことが、すっぽり抜けたまま、活動だけが盛り上がっていた。そのことをこの図をもとみんなで確認できた。方針や、やるべきことが見えた！



課長も補佐も現場も同じ方針で

2. 「基盤づくり(B)」をしっかりと

- ◆ 「見守り・SOS体制づくり」の実際的な取組（全体構造Aのアクション：たとえば、事前登録やSOSネットワーク作り、模擬訓練など）を、スムーズにスタートさせ、その後も順調に拡充させていくためには、「基盤づくり」が非常に重要です。
- ◆ 「見守り・SOS体制づくり」の本格的な取組はこれからという自治体では、まず、この「基盤づくり」から取り組んでいくことが、お勧めです。
- ◆ すでに実際の取組を進めている自治体も、今後の取組がよりスムーズに続いて長続きし、実質的な見守りやSOS時の成果を高めていけるように、「基盤づくり」に力を入れていきましょう。

「基盤づくり」の進め方のポイント

p.13から、「基盤づくり」の各取組であるB1～B7について紹介します。
それらに共通した進め方のポイントがあります。

◆ 普段の中で、少しずつ取り組む

「基盤づくり」の取組（B1～B7）は、普段の業務の中ですぐできること、普段の仕事の延長で取り組めることがたくさんある。

- 自分の仕事や部署内の普段の仕事と関連づけて取り組めることを洗い出してみよう。
- できることから、即、やってみよう。
- 「基盤づくり」の意識を高め、普段の仕事の場面、つながりを活かして、B1～B7を少しずつ、強めていこう。

◆ 一人で頑張らずに、すでにやっている人や得意な人の力を借りる

B1～B7は、いずれも単純なことだが、いざやろうとすると、一つ一つは手間暇がかかる。

- 自分一人でやろうとせず、その取組に近いことをすでにやっている人がいないか、得意そうな人がいないか、役所内、そして地域で探してみよう。
- 躊躇しないで、その人たちの力を借りよう。
 - *力を借りることが、やろうとしていることの理解・つながりを広げることになる。
 - *担当が変わっても、取組が続くことにつながる。



普段の業務の中で基盤づくりのためのチャンスがたくさんある



なるほど。
このためなんだね。
役にたつなら手伝うよ。

力を借りる際、基本パッケージの「全体構造」や「基本指針」を見てもらい、「このために頼む」と位置づけやねらいをきちんと伝えたと伝えると、やる気になってくれる人が多い。



B1. 地元の本人・家族の声を聴く

ねらい

- * 「見守り・SOS体制づくり」の出発点となるのが「本人と家族の声」です。
- * 「何が起き、どんな支援や体制が必要か」
その実際は、体験している本人と家族に聞いてみるのが一番です。
- * 自治体の規模の大小を問わず、行政担当者・関係者自身が本人・家族の声を聴き、本人と家族に役立つ体制のあり方を考えていきましょう。
- * 体制づくりを、本人・家族の視点で考えていく、本人・家族抜きに進めない、という方針を自らの態度で示していきましょう。

メリット・期待されること

本人と家族に実際に会い、生の声を聴くと

- ◆ 日々暮らしていく上での「見守り・SOS体制づくり」の重要性、先送りにはできないことを、リアルに実感できる。
- ◆ 取り組む目的や方針を、一般論・抽象論ではなく地元の現実根拠に根差して考えられる。
- ◆ やるべきことの優先課題や内容を、具体的に知ることができる。
- ◆ 関係者や地域の人たちへの呼びかけを、自分の言葉で、説得力をもって伝えられる。
- ◆ 実効性の高い体制づくりを進めていける。
- ◆ 本人・家族が取組の大事な一員となる。

ステップ

1) 声を聴ける場、人を探してみる

□ 職場や関係者にも相談し、本人、家族の声を（じっくり）聴ける場がどこにあるか、この機会によく探してみる。

- 例：・役所など本人・家族が来所する場面
- ・ 本人・家族が集っている場
 - ・ 本人・家族が普段過ごしている場
 - ・ 医療や介護サービスの場
 - ・ （応じてくれる）本人・家族が、指定した場 など

2) 一人からでもじっくり聴く機会をつくる

□ 自分の立場や話を聴かせてもらうねらいをわかりやすく伝える。

例：安心して出かけられる町にしたいので体験や思いを教えてほしい。

□ 「ありのまま」の話をよく聴く。

3) 時々（定期的に）話を聴く機会をもつ

□ 時々出向いて、その時々声を聴く。

□ 本人・家族が語り合える場：本音を聴ける場を地域の中でつくる。

ポイント

- ◆ 地域を見渡してみると本人、家族の声を聴ける場が、身近にある。
- ◆ 現場から遠くなりしがちな行政職員（特に事務職）が、サービス現場や地域の人たちに「本人、家族の声を聴きたい」と相談をすると喜び、仲介してくれる人たちがどの地域にもいる。
- ◆ 本人と家族を一くくりにしない。
それぞれの体験や必要なことは違う。
本人、家族それぞれから、話を聴く機会を。
- ◆ 認知症はあっても、話を聴こうという人がいてくれると、話せる人がたくさんいる。
- ◆ 漠然と話を聴かれ、「何を話せばいいかわからず、よく話せず残念」という人も。
- ◆ 「あなたの声が大切。大事に活かしていく」という姿勢を示すと、周囲も驚くほどしっかりと話をされる本人が多い。
- ◆ 困りごとや問題だけでなく、楽しみや希望について聴くことで、手がかりがみえる。

- ◆ 家族の集い、そして本人同士の集いが地域にできると、その後の大きな足場になる。

参考：「本人ミーティング開催ガイド」

厚生労働省HPより、ダウンロードを。

実例① 本人の声を聴いてみたい・・・事務職の一言が始まりになった

認知症施策の担当になったばかりの事務職が、「本人の声を聴く」大切さを耳にする。認知症の施策や事業について覚えることに必死で、ふと気づくと本人に会ったことがなかった。
課内の保健師に「本人の声を聴いてみたい」とつぶやいてみた。



新任の担当者：
本人の声を聴いて
みたいなあ。

保健師も「はっ」とした。「毎日相談をうけているが、家族の困りごとを聴くことが中心。本人の話をじっくり聴けてない」。
「全員は無理でも、誰かにじっくり話してもらえないかな」。

たくさん相談を
受けてるけど、
本人の声をじっくり
聴けていない。
一緒に聴いて
みたらいいな。



ちょうど相談に来た本人と妻に「ゆっくり話を聴かせてもらえないか」
お願いしてみる。本人が喜ぶ。「窓口だと妻が話す。ゆっくりなら自分
も話せる」。早速夫妻が役所に来てくれ、静かな部屋で語ってくれた。

相談にきた人に
声かけしてみると

- ♥本人：家の中だけにいると滅入る。出かけたい。気晴らししたい。
外に出ると元気です。出かけようとする止められて、イラっとする。
- ♥妻：自由にさせてあげたいのは山々。でも一人だと迷ってしまう・・・。
私がついて行けない時は止めざるを得ない。毎日気が休まる時がない。
- ♥本人：決まったところなら大丈夫。誰かちょっといてくれば。
(妻を) 楽にしてやりたい。自分も羽を伸ばしたい(笑)。

もっと話したい、
聴いてほしい、
と願っている本人・
家族が地域にいる！

保健師：介護サービスをつなぐというより新たな地域支援が必要。
事務職：認知症高齢者のイメージが変わった。本人はこんなにも深く考えて
いる、ユーモアもある。一方で一見元気そうだが毎日が切実。
家族だけに頑張らせずに本人が出かけられて大丈夫な町にしたい。



本人から
大事なことを
教えて
もらえる！



事務職も
技術職も
いっしょに
やろう。

声をじっくり聞いたことがひとつのきっかけになり、この市では「本人・家族に役立つ支援体制」を共通の方針にして取組が進んでいった。

どうしたらいいか迷ったら
本人・家族の話を聴こう

実例② 本人が集まる場で、外出時の不安・ヒヤリ、工夫や願いを聴いてみた

- ◆この頃、散歩の途中で、あれ、ここどこだっけ？ってわからなくなるんだ。
- ◆ある、ある！言うとお心配されすぎちゃうから、家族や先生(医師)には言えてないけど、私もある。そういう時、どうしてる？
- ◆僕もある。そういう時、焦るとどんどんパニックになる。何度かそれで大変な目にあったんだ・・・。だからこの頃は、まずは道端でじ～っと止まる。しばらく待つと、落ち着いてくるよ。落ち着けばわかるようになる。
- ◆認知症になってから、携帯を覚えて出かける時、必ず持つようにしてる。何かあったら、友達にかけて聞くんだ。押せばいいだけだから。できるよ。
- ◆これからも行きたいのは・・・買物や美容院とか。後、孫の面倒を見に。
- ◆図書館通いは続けたいなあ。映画とか、美術館とか、そういう楽しみを。
- ◆たまにでいい、行きつけの居酒屋に行きたい。行くと顔見知りがいるんだ。

本人同士だと
家族や専門職に
言えないでいた
本音や本人なり
の工夫がたくさん
出てくる。

本人の声を聴いて
おしまいせず、
見守り・SOS体制
づくりの様々な
場面に活かそう。



B1. 地元の本人・家族の声を聴く * この取組を、他の取組につなげて活かそう(主なもの)

→ B2. 実態把握

B4. ビジョン・共通方針

B5. 言葉・用語

B6. アクションミーティング

→ A1. 広報・啓発

A2. 事前登録システム等

A4. 支援者登録システム等

A6. SOSネットワーク



B2. 統計の整備・実態の把握と共有

ねらい

- * 自治体・地域において、認知症の人の行方不明が年間どのくらい発生しているのか、年々その数がどう推移しているのか、それらの統計を整えていくことが、体制づくりを進めていく上での基礎になります。
- * 行方不明がどのような状況で発生し、通報や発見がどのように行われたか、その実態把握を丁寧に行うことが、発生防止や発生時の効果的体制づくりの重要な手がかりになります。
- * 行方不明の心配のある人（ハイリスク者）の実態把握が実際の発生防止に不可欠です。
- * 統計等を行政内部だけでとどめずに、関係者や地域の人と共有を図ることが地域ぐるみの体制づくりにつながります。

メリット・期待されること

- ◆ 行政担当者が、体制づくりに関する計画作成をしたり、上層部や関係者に企画提案をしていく際に、その重要性を説得力をもって伝えていくことができます。
- ◆ 一度作成しておくことで、多様な地域の人たちへの説明場面で利用でき、行方不明に関する関心を高め、体制づくりへの参画者を増やしていくことができます。
- ◆ 漠然とした体制づくりではなく、自地域の実態に応じた具体的・効率的な体制づくりとなっていきます。
- ◆ 取り組んだことの成果や課題、体制づくりの進捗状況を確認するバロメーターになります。

ステップ

1) 警察の担当者と関係を築き情報共有する

- 警察の担当者の所に繰り返し足を運び、顔が見え、連絡・相談しやすい関係に。
- 現状の共有と同時に、警察側にメリットがある事項を中心に行政から情報提供。
例・行政や包括の連絡先・担当者の最新の一覧
・見守り・SOS体制の現状・成果・課題
・地域包括支援センター（包括）等で警察と協働して成果が出た好事例
・認知症サポーター養成講座、受講者数
- 行方不明の統計の情報提供を継続的に依頼。

2) 行方不明発生に関する地域情報の集約

- 役所や包括が把握している行方不明発生に関する情報の集約をする。
- （既にあれば）SOSネットワーク等の登録数や稼働状況のデータを集約する。

3) 実態把握・整理

- 行方不明ケースの実態を把握・整理する。
- ハイリスク者に関して聞き取りやアンケート調査を行い、個人情報に配慮して整理。

4) データ等をわかりやすくまとめ共有を

ポイント

- ◆ 警察が有している「認知症高齢者の行方不明届けの受理人数」に関する統計が、警察から行政に情報提供されている自治体の場合、行政担当者が直接会いに出向いて丁寧に関係作りを重ねているところが多い。
- ◆ 警察側に依頼する一方ではなくgive & takeで、行政との連携で、警察側の業務に役立つ点や負担軽減につながる点についても話し合おう。
- ◆ 会議や研修、講座、報告会等への警察からの参加を依頼し、日常的な関係づくりを。
- ◆ 警察に届け出なかったケースも含め、関係者が把握している行方不明になったケースの情報が行政に確実に届くよう、簡便な報告シートや情報の流れをつくろう。
- ◆ ネットワークの登録数、稼働状況に関するデータを、必ず定期的に集約しよう。
- ◆ 行方不明発生後、時間が経つと実態の把握が困難になりがち。支援につなげるためにも、発生後できるだけ速やかに実態の把握を。
- ◆ 少数でもハイリスク者への聞き取り調査を行うと、支援や体制づくりへの多くの手がかりが得られる。
- ◆ ケアマネジャーや医療機関等にアンケート調査を行うと潜在しているハイリスク者が把握できる。
- ◆ 今あるデータ、ケースの特徴等を有効に活かそう。

実例 行方不明や取組に関するデータを集約・整理し、体制づくりに活用

- 市が把握・整理した情報をもとに、毎年度、統計を作成し公表
体制づくりの成果・課題の検討、改善に活かしている

(兵庫県加東市)

【市へ情報提供があった数】

高齢者の行方不明者の状況

(平成30年1月末まで)

平成25年度まで 24件

平成26年度 10件

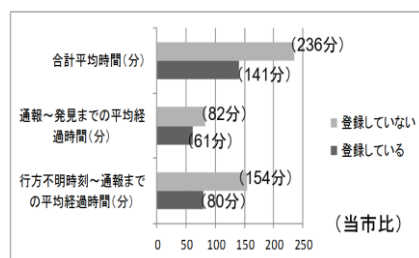
平成27年度 11件

平成28年度 19件

平成29年度 19件

計 83件

	H27年度	H28年度
認知症等と思われる行方不明者	11件	19件
SOSネットワーク登録者	3件	7件
警察への通報数	7件	17件
かとう安心ネット	4件	2件
死亡発見	1件	0件



事前登録者と未登録者の発見までの時間の比較

- ホームページで最新統計資料を公表
～統計を区別に作成、より身近な地域で活用～

(愛知県名古屋市中)

おかえり支援サポーター	2,961人	2,961アドレス	計
協力事業者	163団体	5,292アドレス	8,253アドレス

区分	おかえり支援サポーター			協力事業者			計
	夜間あり	夜間なし	小計	夜間あり	夜間なし	小計	
千種	363	312	675	239	1,964	2,203	2,878
東	318	237	555	232	1,954	2,186	2,741
北	323	265	588	238	2,088	2,326	2,914

搜索協力依頼メール配信件数

区分	24	25	26	27	28	29	計
配信件数	22	44	99	245	270	278	958
(再掲) サポーターが発見	2	0	3	0	0	1	6
(再掲) 協力事業者が発見	1	1	0	1	0	3	6

- 警察から市に、発見・保護後の情報が提供される制度運用後の警察からの情報提供数

(大阪府東大阪市)

警察よりの発見・保護後の情報提供件数(平成29年)

	件数	内訳			
		布施	河内	枚岡	市外
1月	39	23	5	11	0
2月	34	20	8	5	1
3月	29	14	8	7	0
4月	36	20	6	9	1
5月	28	14	4	7	3
6月	29	16	6	5	2
計	195	107	37	44	7

*詳しくは、A8. アフターサポートシステム(P.44の実例②)を参照。

- SOSネットワークの利用数の推移：データを毎年積み上げ、推移をわかりやすく提示(釧路地域)
～実績を検証しシステムの見直し・改善を続ける～

平成6年から平成25年までの利用推移



表 発見者の5年間の推移

	H23	H24	H25	H26	H27
警察官	12	16	22	25	22
通行人	9	12	18	6	10
家族等	5	16	17	6	5
タクシー	1	0	2	2	1
自力帰宅	15	6	14	28	16
その他	6	10	5	9	18
計	48	60	78	76	72

平成27年度釧路地域SOSネットワーク事業実績より
(北海道釧路保健所健康推進課健康支援係)

B2. 統計の整備・実態の把握と共有

*この取組を、他の取組につなげて活かそう(主なもの)

→ B4. ビジョン・共通方針

B5. 言葉・用語

B6. アクションミーティング

B7. 仲間を増やす

→ A1. 広報・啓発

A2. 事前登録システム等

A4. 支援者登録システム等

A6. SOSネットワーク

A7. 模擬訓練

A8. アフターサポートシステム



B3. 事務局とコアチームをつくる

ねらい

- * 見守り・SOS体制づくりを着実に進めていくためには、運営を統括し、目的を実現するための実質的作業を行う事務局機能が非常に重要です。
- * 事務局を組織として設置していなくとも、その働きをどこが（誰が）担うかを明確にしておく必要があります。
- * 事務局（役の人）と協力し、一緒に考えながら取組をより良いものにしていこうという地域の主体的な人たち（コアメンバー）の緩やかな集まり（推進コアチーム）をつくっていくことが大切です。

メリット・期待されること

【事務局をつくることを通じて】

- ◆ 運営統括の主体が明確になり、見守り・SOS体制づくりが一体的・効率的・継続的に進むようになります。
- * 取組が一時的に活発になっても事務局が明確に作られていなかったために活動が停滞し、またなくなってしまう地域もみられています。
- ◆ 事務局機能を担う人の存在（の価値）や位置づけが明確になり、その人がシャドウワークで過重の負担を強いられることを防ぐことにもなります。

【推進コアチームをつくることを通じて】

- ◆ 体制づくりが加速します。
- ◆ 行政や事務局の担当者が異動（交代）しても、取組が持続発展していきます。

ステップ

【事務局をつくる】

事務局機能について話し合いながら強化

- 事務局機能をどこに置くことが自地域でよりよいかを、行政担当部署や関係者で話し合い事務局を設置する。
設置場所の例：
行政の担当部署、保健所、社協、地域で認知症の人の地域支援活動の実績のある介護事業者・医療機関、NPO組織、等
- 事務局の設置を事業の要綱等に明記する。
- 事務局担当者や関係者で、定例的＋随時の話し合いを重ね、体制づくりのビジョン・方針合わせをしながら進める。
- 取組が進み、事務局として必要な作業範囲や作業量が増えていく中で、設置場所や人員等を見直し、補強をしていく。

【多資源で推進コアチームをつくる】

- 事務局とともに体制づくりの核となって自らが推進していこうという地域の多様な人材が集まりチームをつくる。
- 最初は方針を共有して主体的に動く人が少人数からでもスタートし、活動しながらチームメンバーを増やしていく。

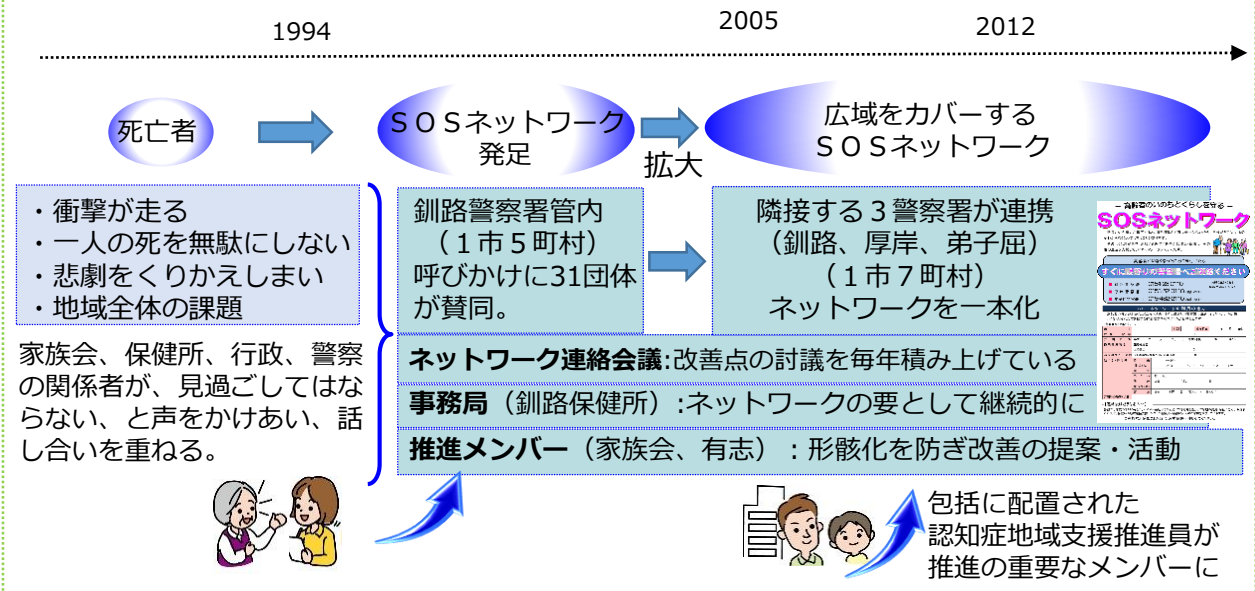
ポイント

- ◆ 事務局や推進コアチームは、自分の地域に根差した体制づくりが進んでいくための企画をたて関係者の合意を図りながら、多くの人の力を結集して、取組を一つひとつ柔軟に進めていく縁の下での力持ちです。
- ◆ 事務局や推進コアチームの設置場所や規模、役割範囲は一律ではなく、カタチより機能重視でその自治体・地域にあったものを、関係者でよく話し合いながらつくっていく過程が大切です。
- ◆ 事務局がカタチだけになったり、作業をこなすだけになると、体制づくりそのものも形骸化してしまいます。
- ◆ 担当する人たちが、何をめざしてどのように取り組んでいくか、ビジョンや方針を常に確認・共有していくことがとても重要です。
- ◆ 事務局や推進コアチームのメンバーとして力を発揮する人材が、役所の内外、地域にいます。
- ◆ 事務局やコアチームが一部の人だけの閉鎖的なものになってしまわないよう、適任者がいないか、関係者や地域に呼びかけながら、参画者、協力者を増やしていくことが必要です。
- ◆ 見守り・SOS体制づくりは、長い年月をかけて息長く続けていく取組であり、事務局やコアメンバーに新しいメンバー（特に若い世代）が参画できるチャンスをつくっていくことが、取組の活力を維持しながら持続発展していくポイントです。

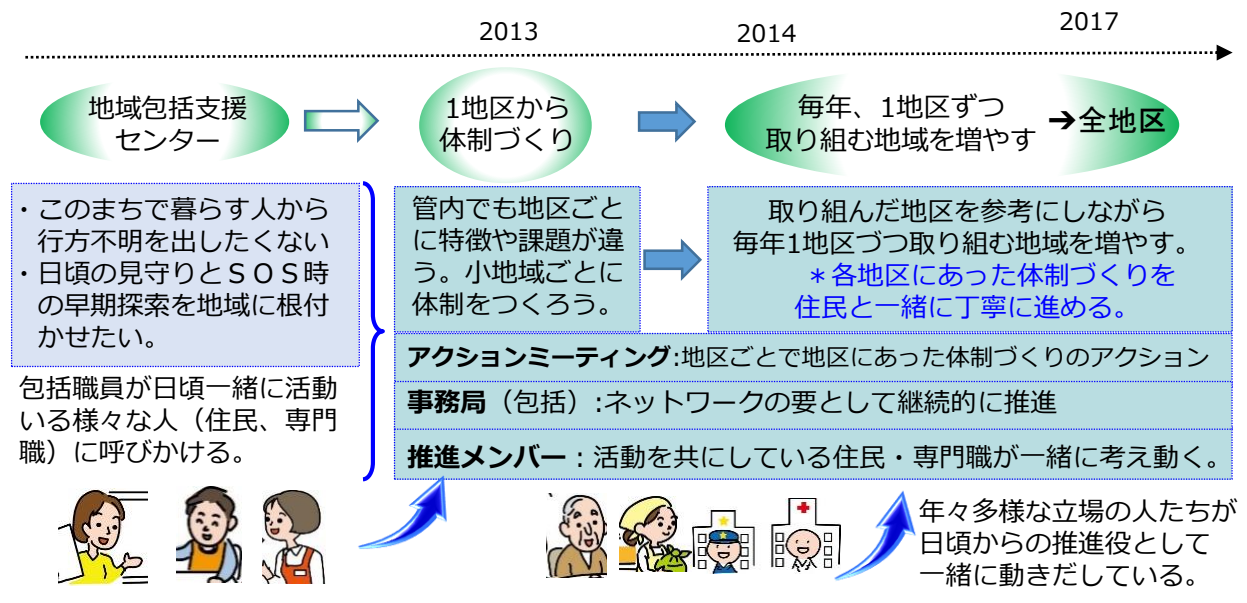
実 例

行方不明をなくし、安心して外出できるまちをつくりたい！
～素朴な願いから事務局・推進コアチームが誕生し、息長く推進～

- スタートは一人の死亡者。「命を守ろう」「本人と家族と一緒に支えよう」という人たちが結集
事務局、推進メンバーが、原点を語り継ぎながら、活きたネットワークをつくる（北海道釧路地域）

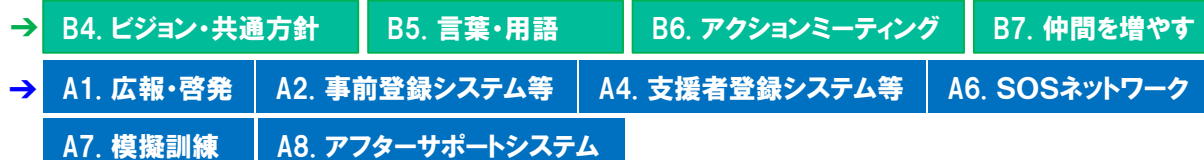


- 「行きたいところに行け、行方不明にならない町にしたい」
地域包括支援センター（包括）の呼びかけに、地域の多様な人たちが呼応（新潟県湯沢町）



B3. 事務局・推進コアチームをつくる

* この取組を、他の取組につなげて活かそう（主なもの）





B4. ビジョンと共通方針の共有

ねらい

- * 見守り・SOS体制づくりを、何をめざして進めていけばいいのか、関係者や地域の人たちが方向性を見失わずに、同じ方向を向いて進んでいけるために、自分の自治体・地域としての体制づくりのビジョン（めざしたいこと、将来実現したいイメージ）について話し合い、関係者や地域の人と共有していきます。
- * 体制づくりを進める上で、どんな人でも、どの段階・場面でもみんなで重視していきたい方針（共通方針）について話し合い、共有をはかっていきます。

メリット・期待されること

【ビジョンが共有されることで】

- ◆ 立場や職種の違いを超えて、「こう言う地域を一緒にめざそう」という結集軸ができる。仲間が増える。
- ◆ 見守り・SOS体制づくりの様々な取組は、ビジョンにむけた手段であり、やっておしまいにならないこと、ビジョンに向けた継続的な取組の必要性を（再）確認しやすくなる。
- ◆ 計画立案、見直し・評価のための基になる。
- ◆ 形骸化、マンネリ化を防ぎ、実効性のある体制をつくっていくことにつながる。

【共通方針が共有されることで】

- ◆ 様々な関係者が、方針の違いによって消耗したり、取組が進まなくなること防ぐ。
- ◆ 様々な取組を共通の方針で着実に進めていくことができ、体制づくり全体がスピードアップする。

ステップ

【ビジョンの話し合いと共有】

1) 認知所施策担当者・事務局（機能を持つ人たち）や推進する立場の人たちが

- 現状を踏まえつつ、将来は、どんな地域であってほしいか、具体的に話し合う。
- 地元の風景や暮らしを思い浮かべながら地元のことばで話し合う。
- 自分事として、率直に話し合う。
- 話し合ったことを、一緒にわかりやすくまとめ「これでいこう」と合意をする。

2) 様々な機会に、地域の人たちとともに

- 1) でつくったビジョンを地域の様々な場で伝えながら上記と同様なステップでの話し合いを重ね、より地域にあった具体的な内容や表現にしていく。

【共通方針の共有】

事務局（機能を持つ人たち）や推進する立場の人たちが

- ビジョンの実現のために、わが自治体・地域でどのような共通方針で進めていくことが必要か、具体的に話し合う。
- 話し合った内容をわかりやすくまとめて共有し、取組過程で繰り返し活かす。

ポイント

- ◆ 大上段に構えず、認知症になっても安心・安全に外出できるように「こんな地域だったらいいなあ」というイメージをどんどん出し合い、一緒にビジョン（将来像）を描いていこう。
- ◆ 一般論や抽象論になってしまわないよう、本人や家族の声（B1）をまずは聞いてたり、統計や実態（B2）を確認し、将来どのように変わってほしいかを具体的に話し合おう。
- ◆ 会議室等で話し合っていると煮詰まりがち。実際の地域に活かしていくことを考えよう。
- ◆ 地元のことばでビジョンを描いていくと、地域の人たちとも共有しやすくなる。
- ◆ 最初から「ビジョン」を固定化しすぎず、様々な声を活かしながらバージョンアップしていこう。
- ◆ ビジョンや基本方針は、普段の中で活かしてこそ価値がある。そのためにも、わかりやすく表現しよう。ビジョンを、ビジュアルな絵図や、簡潔なスローガンにすると地域に浸透しやすい。
- ◆ 見守り・SOS体制づくりは、認知症に関する地域の偏見の解消の大きなチャンス。方針をしっかり打ち出そう。
- ◆ 基本指針（P.4）や全体構造（P.4）を参考にしながら、今後自地域で、みんなで大事にしていきたい方針をできるだけ早い段階で話し合っておこう。
- ◆ 共通方針を取組のプロセスにそって活かそう。
 - ・ 取組のスタート段階
 - ・ 取組が具体的に進み始めた段階
 - ・ まとめや見直しの段階
 - ・ 担当者の交代の時期、新メンバーが加わった時

実例① これまで通り、出かけたがたい：問題対処でなく、自分ごととして

別の部署からの異動で、認知症担当になる。行方不明者が市内でも増えていて、その対策が求められていることを知る。行方不明が発生したらどう速やかに発見・保護するか、その体制を作らなければと思った。



やることが山積み。
行方不明対策も、
何かしなきゃあ。

担当者

担当になって間もない頃、行方不明になる心配があって家族が困っているという相談に同席する機会があった。家族が目を見せない大変な日々の状況をひとしきり話されたその後、本人がポツリとつぶやいた。

◆家の中ばかりにいと頭の中がもやもやしてくる。(外に出て)一周してくるとすっきりする。いい季節になってきたからあそこ(まちのみんなの憩いの場になっている川沿い)の若葉が今きれいだよ。帰りにいつものとこ(お店)によるんだ。いつもの連中が誰かしらいて、「よお、来たか」って(うれしそう)。

家族にとって日々切実。
本人はどうなのか



外に出て迷うことがある。
でも外に出ることで、気持ちや体の元気を保て、外に出た日はぐっすり眠れる。
仲間とのつながりや対話が
続けられている。

はっとした。自分は、行方不明の問題対処ばかりに頭がいて、本人のことがすっぱり抜けていた。その人が言ってること、ぐっときた。自分もそうだったら外に出たいよな。『なじみの地域で安心して暮らし続ける』って大仰なことではなく、その人がこれまでどおり暮らしを続けていける、そんな普通のことなんだった実感。



自分だったら・・・。
これまでどおり外に出かけたがたいなあ。

保健師や係のみんなで話したら、これからはまちに出かけて楽しいしてほしいよね、家族だけに頑張らせずにこの人がつながっている人たちやまちの人たちと一緒に安全を守れる町にしたいよねって、みんな一致。行方不明対策って構えずに、自分事としてあたりまえの暮らしが続けられる町をめざそう、おたがいさまだねって言いあえる取組をしよう、と。これがずっと、うちの市の取組のベースになってるんです。



こんなまちになるといいね。
みんなが自分事として
素朴に話し合い、自分たちが
大事にしたいビジョン・方針が
生まれた。

実例② 地域で無理・・・：地域のかげがえのなさの共有からビジョンへ

行方不明の心配のある人をみんなで見守る地域にしたい、取組と一緒に民生・児童委員や地域の中心的人物に話しに回ったが「そんな人は、地域では無理。早く施設か病院にいれるべき」「また大変なことに私たちを使うのか」など、厳しい意見が続出。



認知症は、
地域で無理。

自分たちをまた使うのか！

このまま取組を進めても形だけ、かけ声倒れで終わってしまう。担当で思案をして、まずは地域の人たちと、このまちでの今の日々の暮らしそしてこの先老い・認知症になっての暮らしについて率直に話し合ってみる集まりを開いてみることにした。

自分の日々、これから
がどうあってほしいか、
話し合ってみよう。



認知症になってからこそ
なじみの地域で、なじみの
人の中で暮らし続けたい。
やらされてなく、自分たち
から一緒に、やっていこう。

口コミで地域住民、介護や医療の専門職が30名近く集まり、ざっくばらんに話し合う。普段何気なく暮らしている地域が、安心して自分らしく暮らしていくためにどれほどかけがえないか、認知症になってからこそ、この地域の風景の中でなじみの人に囲まれて暮らしていきたい、という声が相次ぐ。そのためには行政任せでなく、みんなで一緒にやっていこうという声も参加者の中から出て、取り組んでいく大事な足場に。

B4. ビジョン・共通方針の共有

* この取組を、他の取組につなげて活かそう(主なもの)

→ B5. 言葉・用語の見直しと配慮

B6. アクションミーティング

B7. 仲間を増やす

→ A1. 広報・啓発

A3. 個別支援ネットワーク

A6. SOSネットワーク

A8. アフターサポートシステム



B5. 言葉・用語の見直しと配慮

ねらい

- * 取組を進めていく過程で使用する言葉や用語が、見守り・SOS体制づくりの進展や中身を大きく左右します。
- * 後での混乱をできるだけ避けるために、取組がスタートする前段階で言葉・用語を検討し、配慮のある言葉・用語を使用していくことが望まれます。
- * 一度決めた後も、話し合いや文書・配布物の作成、説明や呼びかけ等で使用する言葉や用語が、見守り・SOS体制づくりを推進していくためにふさわしい表現になっているか、逆に誤解や偏見を助長してしまったり、本人や家族等に嫌な思いや負担感を抱かせてしまったり、取組とつながりにくくしてしまっているような表現がないか、取組の過程で関心を払い、見直しや改善を続けていくことが体制づくりの推進になります。

メリット・期待されること

- ◆ 見守り・SOS体制づくりに関する言葉・用語に関心を払い、自分の自治体・地域でどういう表現にしていっていいか、行政担当者や事務局関係者と一緒に考えたり、話し合ってみる過程の中で、自治体・地域としてめざしていることや大切にすべきことについての共通理解を深め、結束力を固めていくことにつながります。
- ◆ 配慮のある言葉・用語の使用を通じて、地域の人たちの認知症の人に関する理解が深まり、普段からの支援や体制づくりの進展・加速化につながります。
- ◆ 配慮のある言葉・用語は、それに触れる本人・家族らに安心をもたらす、地域や行政への信頼感を高めたり、（早期の）支援につながるきっかけになります。

ステップ

1) これまで自分の自治体・地域の関係者が使用してきた見守り・SOS体制に関する言葉や用語を見直してみよう。

- ☐ 以下で使われている言葉・用語を見直そう。
 - ・ 普段の業務、話し合い、会議等
 - ・ 研修、講座、講演会等
 - ・ 要綱、配布資料、チラシ等の中の表記
- ☐ 以下の観点から、担当者・関係者が一緒に話し合いながら見直そう
 - ・ 本人、家族からみてどうか。
不安を煽られる、傷つけられる、嫌な思いをする等の表現がないか。
 - ・ 地域の関係者からみてどうか。
認知症の人を問題視したり、画一的にみなしてしまう表現、なりたくない、他人事とみなしてしまう表現がないか。
行政に活用される、負担が増えると感じてしまうような表現がないか。
 - ・ 医学用語や国の用語、警察用語をそのまま使っていないか。
難しくわかりにくい、馴染みにくくないか。

2) より良い表現を話し合い、地域で共有

- ☐ 一つの言葉・用語からでも、地域で共に取り組みやすくなる表現を工夫しよう。
- ☐ その言葉・用語を使っていく意味を書き出し、様々な場面で伝え、共有・浸透を。

ポイント

- ◆ 行政や関係者が、これまで何気なく使っていた言葉・用語の中に、体制づくりが進まない・広がらない・成果がでない引き金になってしまっている言葉・表現が潜んでいることがあります。
- ◆ 取組のできるだけ早い段階で、行政・関係者が一緒に見直す機会を作り、集中的に話し合ってみることが、先々役立ちます。
- ◆ 本人、家族に見直し作業に加わってもらったり、書面やチラシ等をみてもらって率直な意見を聞く機会をつくると効果的です。
- ◆ 地域の人たちの意見も聞きましょう。
 - * 民生・児童委員以外の人の意見も
- ◆ 体制づくりの試行錯誤の中で、言葉や用語の見直しを積み重ねてきている地域があります。自地域にあった言葉・用語にしていくなための参考にしましょう（右ページ参照）。
 - * なぜ、そうした見直しをしたかの意味に注目しよう。
- ◆ 自地域としての言葉・用語を、一緒に話し合いながら決めよう。
→それを一緒に広めていこう。

実 例 ことば・用語を大切に：自地域の体制づくりが進むために

●「徘徊」の文字を使わない方針を掲げる。 やさしい用語を検討し普及をはかる（兵庫県）

- ◆県として、認知症の人が安心して外出できる地域社会をつくっていくことを目指して、管内の全市町が、事前登録による見守りのネットワークと行方不明時の早期発見に向けたネットワークを車の両輪とした「認知症高齢者等の見守り・SOSネットワーク」の構築を経年的に推進している。
- ◆言葉・用語を見直す過程で、「従来、行方不明者の代名詞のように使われてきていた「徘徊」という用語が、地域の人たちに「認知症＝徘徊」といった誤ったイメージを固定しかねないことから、「徘徊」の文字を使わないこととする」方針をたてた。
- ◆このことを、市町向けのネットワーク構築のための手引きの冒頭に明記。
- ◆なお、県では、行方不明が発生した際に従来使われていた「搜索」という語の見直しも行い、地域での取組においては「発見協力」という語を使用している。
- ◆県担当者が研修会等で、用語の考え方についても説明し普及を図っている。



認知症高齢者等の
見守り・SOSネット
ワーク構築の手引き
（兵庫県・兵庫県警）

●「徘徊」について地域で本音の話し合い。 次の世代のためにも使わない（福岡県大牟田市）

- 【「徘徊」という語を使っていた時期】
- ◆安心して暮らせるために「徘徊＝ノー」ではなく、「安心して徘徊できる町」をスローガンとした本格的な取組を2003年から始動。
- ◆「どうしたら命を守れるか」、行政と関係者、住民との話し合いの中で模擬訓練のアイデアが生まれ、2004年から「大牟田市ほっと・安心徘徊ネットワーク模擬訓練」スタート。
- ◆「徘徊ネットワーク模擬訓練」が全市に広がり、その名称も浸透。同名のネットワークや模擬訓練が全国各地にも広がる。
- 【地域で話し合い、市民の声をもとに使わない方針】
- ◆本人が参画する機会が増える中で「徘徊でなく理由があって歩いている」、「わたしたちを徘徊する人といった目で見るのはやめてほしい」等、本人からの声があがる。
- ◆「徘徊」という語を使わないことについて2015年頃から地域で意見交換を重ねる。浸透しているし関心と呼ぶので使う方がいいという意見もあったが、地域の人から、次世代にしっかりと本人の尊厳を考えたまちづくりを伝えていくためにも使わない方がいいという意見が多く、市として使わない方針を決めた。



一緒に話し合おう

●「搜索」ではなく、「探索」に：本人、家族の気持ちになろうと呼びかける（新潟県湯沢町）

- ◆行方不明が発生した際に、地域の人みんなで探す訓練を実施することに。
- ◆どういう名称をつけるか、「搜索訓練」としてしまうと、「搜索」という言葉が地域の人たちに「警察沙汰」「厄介ごと」という負のイメージを抱かせてしまい、本人・家族へのやさしい理解や参加協力のブレーキ、何よりも家族が仕組を利用することの躊躇を招いてしまいかねない。
- ◆担当で話し合い、本人や家族の思いを大切に地域で一緒に探してみる意味を込めて「探索訓練」とすることに決まった。



一緒に探そう：本人、
家族の身になりながら

●警察に「やさしい表現」を提案（釧路地域）

- ◆言葉の見直しを行っている過程で、行方不明を体験したことのある家族から、「警察に届け出た時の書類に凍りついた」、という声が聞かれた。
- ◆警察にとっては、あたりまえの「手配書」、「人相」という語が、家族にとっては「犯人扱いされているようで怖くて届出をやめたくなった」と。
- ◆この声を聴き流さずに、警察に伝えたところ、「気づかなかった。家族への配慮が必要」と、書面の語が手直しされた。家族のダメージを減らし、警察に届け出やすくなる一歩になった。

「人相」という言葉が「顔つき」に手直しされた。

身長	cm	体重
頭髪		帽子
上衣		下衣
所持品		所持品



B5. 言葉・用語の見直しと配慮

* この取組を、他の取組につなげて活かそう（主なもの）

→ B4. ビジョン・共通方針

B6. アクションミーティング

B7. 仲間を増やす

→ A1. 広報・啓発

A2. 事前登録システム等

A4. 支援者登録システム等

A6. SOSネットワーク

A7. 模擬訓練

A8. アフターサポートシステム



B6. アクションミーティング 立場を超えて話し合い一緒にできることを考える

ねらい

- * アクションミーティングは、地域づくりを進めるために、様々なテーマや場面で使われる方策です。見守り・SOS体制づくりをテーマに行うことで、体制づくり全体が効率的に進むための原動力（エンジン）になる非常に重要な取組です。
- * 多様な立場の人たちが集まって率直に話し合い、一緒にできることを見つけて速やかに活動につなげていくことがねらいです。
- * 行政側で企画・立案をした後に地域の人たちに協力を依頼する従来の行政主導のやり方ではなく、企画・立案段階から多様な人たちと行政と一緒に考え、地域にあった実質的な活動を、地域の人たちが主体的に進めていくことを促進する共創・協働型の方策に転換を図る大きなねらいです。

なお、「SOS模擬訓練の企画」等、テーマを絞って企画から実行まで一緒に進める場合もあります。

* p.42参照。

メリット・期待されること

- ◆ 同じ自治体・地域にいても出会っていなかった多様な立場の人たちが、アクションミーティングを通じて出会い、顔なじみになります。
- ◆ 立場を超えて「行方不明にならずに安心して暮らせる地域」を一緒に目指し、力を合わせて取り組んでいく仲間が増えていきます。
- ◆ 参加者の発想やアイデアをもとに、行政だけでは思いつかなかった地域に根差した活動やダイナミックな活動が生まれ、本人や家族に役立つ体制づくりが進みます。
- ◆ 参加者がやりたいテーマごとにチームを結成することで、体制作りに必要な一つ一つの取組（全体図のA1～A8、p.28参照）が、具体的かつ活発に進むようになります。
- ◆ 行政の担当者が変わっても、参加したメンバーやチームによって、活動や体制づくりが継続的に発展していきます。

ステップ

1) 事前準備：事務局とコアメンバーが取り組む

- 主力になりそうな人と話し合う
 - ・ 地域でこれまで取り組んできたり、ネットワークの要になっている人に会いに行く。
 - ・ ねらいを伝え「一緒にやろう」と合意形成
 - ・ 参加者候補、声かけの仕方を相談する。
 - ・ 参加者が集まりやすい日程、場所を決める。
 - ・ 当日、参加者が活発に話し合えるための地元にあった進め方やシナリオを話し合う。
- 参加者を募る
 - ・ 集まりのねらいや何を一緒にするかをシンプルに書いたチラシを用意し、来てほしい人に直接会って手渡し、参加を呼びかける。
 - ・ あるいは、来てほしい人たち行き届くようにチラシ等を配布する、関係者から渡してもらう。
 - ・ 参加者のおおよその顔ぶれ、数を把握する。
- 当日の準備（進行・シナリオ、役割分担、会場等）。

2) 当日：参加者の力を活かしながら一緒に進める

- ・ シナリオをもとに進行するが、参加者同士の話し合いの進み具合に応じて、柔軟に進める。
- ・ 話し合った内容を報告しあい、全体で共有して一緒に考え、一緒に進むモードをつくる。

3) 当日の振り返り：継続とアクションの展開策検討

- ・ 事務局メンバー等で、開催してみての感想、気づきを出し合い、話し合われた内容を活かしながら、次回の進め方やアクションの展開を協議。

ポイント

- ◆ まずは、やってみること * 取り組んだ担当者の共通意見やる前はどうか見えず不安がつきもの。1回やってみると流れがわかり、何よりも参加者・地域のチカラが想像以上。参加者の力を活かすと自然に展開していく。
- ◆ 専門職（医療や介護、地域福祉、法律等）、地域の住民や働く人たちの中に、アクションミーティングやその後のアクションの中心となって活躍していく人がある。
- ◆ 地域をよくみて、それらの人に会いに行き、準備段階から一緒に進めていけると、その後が展開しやすくなる。
- ◆ 最初は、少人数からでも「一緒にやってみたい」という有志を募ろう。
- ◆ 小さく始め、回を重ねるごとに参加者を増やしていく。
- ◆ 立場や職種を問わず、仲間が一人仲間を誘って来てもらうことが効果的。
例：行政職が、以前の部署の仲間を
保健師が、PTAのママ友を
包括職員が、中学校時代の同級生の商店主を
- ◆ 当日の話し合いの進行補助や記録係も、可能なら確保。
* 参加者に依頼すると力を発揮する人が多い。
- ◆ 「何を目指して、何を話し合うか」。ビジョンや話し合うテーマを、わかりやすく伝え、その確認・共有を。
- ◆ 一般論や批判に流れずに、これからのためにやってみようというアイデアを具体的に話し合おうと呼びかける。
- ◆ 参加者の一つ一つのアイデアを大切に、類似の内容・テーマごとに集約していこう。
- ◆ それを参加者にフィードバック。自分たちのアイデアが活動を生み出していく過程・楽しさを共有しよう。

実 例

行政が呼びかけアクションミーティング

～動き出すチャンスを待っていた多様な人たちが出会い、つながり、大きなチカラに～

●まずはスタート。地域のチカラが湧き出てきた。 多様な職域の人達、住民、介護職の混成チーム が生まれ、自主活動の展開へ（静岡県湖西市）

- ◆新しいものを一からつくるのではなく、関連する人たち・事業をつないで普段からの見守り体制を強化していくための方策として、アクションミーティングをやってみることに。
- ◆約1か月の間を空けてまず3回シリーズで実施。（その後、年間を通じて毎月1回、継続的に）
- ◆ねらいが伝わるミーティングの名称を工夫。「地域でできる見守りについて考える会」とした。
- ◆呼びかけ方・チラシを工夫
市の方針をメッセージとしてわかりやすく表現。
 - ・行方不明0の町にしたい。
 - ・立場を超えて、まずは地域で一緒に集まろう。
 - ・堅苦しくなく、これからの町のために自由にアイデアを出し合いながら
 - ・やらされでなく、楽しく自由に動きだそう。
- ◆参加者を限定せず、地域に呼びかけた。
→30名も参集！→口コミで参加者が拡大。



ヤクルトの若者が駆けつけてくれた



地元信金の職員が進行や報告を自ら



地域で共にと願う住民と専門職が

- ◆参加者同士の自由な話し合いを通じて、やりたいことを同じくする人同士の5つのアクションチームが誕生。
→即、アクション開始。
- ◆自主的に動き、月1回全体で集合。市はバックアップ役。



●「家を出ても大丈夫っちゃ」といえる町に。 方針合わせをし、アクションミーティングを 開催。本人参加で一気に動く（福岡県みやこ町）

- ◆SOSネットワーク事業や事前登録の仕組み、行政として作ってはあったが、実働していない現状がある。
- ◆担当部署職員の話し合いを重ね、事業ありき、ではなく、この町で暮らす「本人のために」という方針を行政として固める。地域の人たちと一緒に、実働性の高い見守り・SOSネットワークを（再）構築していこう、そのためにアクションミーティング（2回シリーズ）をやってみることに。
- ◆参加してもらいたい人のところに出向いて、ねらいを説明。この過程で、それぞれの思いやすでにやっている自主的な動きを発見。こうした力を活かし合える集まりにしたい。
- ◆第1回のアクションミーティングには、認知症フォローアップ講座受講者、介護家族の会、民生委員、区長、消防団長、役場OB、社協、介護事業者、総務課危機管理対策係等、多彩な人たちが（35名）が参加。沢山の課題とともに、「この町で暮らしていきたい」「立場が違う人たちが集まり話し合いできることから動こう」「本人・家族の声から」という真剣な討議がなされる。
- ◆第2回アクションミーティングに本人（90歳、一人暮らし）が参加（包括が関わり始めていた人。声をかけたら参加してくれた）。
- ◆本人の存在と声で、本人が安心・安全に暮らせるために何が必要で、みんなで今、何ができるか、話し合いが一気に具体化。



本人



こうした場が嬉しい。自分も一緒に勉強したい。

- ◆話し合いをもとに、すぐに地域の人と行政が動き出す。本人と共に創りだす（小さな）成功体験の共有が弾みとなり、対話と協働が広がっている。

* アクションミーティングの詳しい情報については、ホームページ DCネットをご参照下さい。

- ①湖西市とみやこ町の取組について（平成29年度厚生労働省 老人保健健康増進等事業）
「認知症の人の行方不明や事故等の未然防止のための見守り体制構築に関する調査研究事業」報告書
- ②アクションミーティングの進め方について
「行方不明をみんなで防ぐ アクションガイド」 いずれも認知症介護研究・研修東京センター



B6. アクションミーティング

* この取組を、他の取組につなげて活かそう（主なもの）

→ B4. ビジョン・共通方針

B5. 言葉・用語の見直しと配慮

B7. 仲間を増やす

→ A1. 広報・啓発

A2. 事前登録システム等

A4. 支援者登録システム等

A6. SOSネットワーク

A7. 模擬訓練

A8. アフターサポートシステム



B7. 仲間を増やす：領域や世代を超えて

ねらい

- * 認知症（疑いを含む）の本人たち、特に発症間もない人や初期段階の人たちは、私たちと同じように地域に出かけ、仕事を続けている人もおり、地域にいる実に多様な人たちと接点を持って暮らしています。
- * 本人が安心・安全に日々を過ごし行くためには、医療・介護・福祉等の関係者はもちろんのこと、地域の誰もが、認知症を他人事ではなく自分事として受け止めて、支えあって暮らしていこうという意識を育んでいくことが大切です。
- * 認知症について日常の中で自然体で語り合え、一緒に支え合っていこうという仲間を一人ずつ増やしていっていくことが大切です。

メリット・期待されること

- ◆ 見守り・SOS体制の実質は、「人」で成り立っています。仲間が増え、その層が広がることが見守り・SOS体制づくりがスムーズに進んで持続し、実質的な成果を上げていくための極めて重要な基盤になります。
- ◆ 「行方不明を防ぐ」ことだけに特化しない日頃からの仲間を増やし、日常的な関係を築いていくことが、ゆるやかで自然体の見守りや、いざという時に親身に探す動きにつながります。
- ◆ いつものメンバーや関係者以外の、領域を超えた新たな仲間・つながりが、新しい解決力を生み出します。

ステップ

1) 視野を広げて、わがまちを見つめなおそう

□暮らす目になって、新鮮に

- ・自分の立場や職種の枠から少し自由になり、「地域で暮らす目」になって、自分の地域のどんなところに、どんな人がいるか、新鮮に見つめなおしてみよう。

□民産学官、わがまちならではのかけがいのない人たちを（再）発見しよう

- ・本人が安心・安全に地域で暮らしていくためには、無関係な人はいない、というほど多種多様な人たちの存在が貴重。
- ・民産学官、あらゆる領域に視野を広げて、「そうだ！わがまちではこんな人もいる」という発見をしよう。

2) 自分が壁を作らず声をかける、会いに行く

□この人は関心がない、無理、と決めつけない

- ・一見関係ないように見える人たちの中にも、きっかけがあれば、良き見守り手や一緒に活動に参加し活躍してくれる人たちがいる。
- ・自分の中にある思いこみ、壁を取り払おう。

□出向いて会う、呼びかけ続ける

- ・仲間になってもらうには、出向くこと、顔を知ってもらうことが肝心。ねらいやビジョンをわかりやすく伝え、「ちょっと、一緒に」と、呼びかけ続けよう。

3) 「ちょっと一緒に」楽しい体験の共有を

- ・ハードルを低く、気軽に参加でき、「また会いたい」、「また参加したい」と思ってもらえる楽しい体験を一緒にできる機会をつくろう。

ポイント

- ◆ 行方不明に関連する取組や認知症施策、現在取り組んでいる事業などでいつも関わっている人たちはもちろん大切だが、固定化してしまっていないか、一部の人に限られてしまっていないか、あらためて見直してみよう。
例：「住民」に来てもらっているつもりだったが、いつも町内会長や民生委員、教室参加者など、いつもお決まりのメンバーになっていた。
- ◆ ひとりではなく、数人で、あるいは多人数の集まりで、集中的に、仲間候補を発見しよう。
- ◆ その時だけではなく、常日頃から「仲間探し」を。
例：町を歩きながら。通勤途上で。立ち話の時に等
- ◆ 存在を「見える化」しよう。
例：一覧表にする、住宅地図に書き込む、わかりやすい絵や写真で紹介する、等
- ◆ 認知症ケアパスの見直し・補強にも活かそう。
- ◆ 仕事の関係者だけでなく、自分のこれまで子供の頃からの友人やつきあいのある人たち（同級生、遊びやスポーツ、趣味仲間、子育て仲間等）が、見守り・SOSネットワークを作っていく上での思いがけないつなぎ役になる場合も少なくない。
- ◆ きっかけを待っている人が、まちにはたくさんいる。
- ◆ ストレートに出向いて丁寧に呼びかけたことで、取組に賛同・参加してくれる人たちも少なくない。
- ◆ それが難しい場合、仲間になってもらいたい人とつながりのある人を探して、口添えや仲介役をお願いしたり、同行してもらったり、馴染みの人の力を借りよう。
- ◆ 地域の多様な人々に、いきなり「見守り・SOSネットワーク等」に参加・協力を呼びかけても、ハードルが高く加わる人が限られがち。
- ◆ まずは、楽しい、心地よい、美味しいなど、人が自然と集まる機会を作り、本人とも自然と交流できるように機会をつくり、仲間の裾野を広げよう。

参 考 民産学官、わがまちで暮らし、働く多種多世代な人たちとともに



こんな人たちがいる！
本人、家族も一緒に
わがまちなりの大切
な仲間を再発見。

そういえば・・・
うちのまちなりに
色んな人たちが
いる！



仲間が増えると
楽になる、元気が
湧いてくる。



- ▶ 町会・自治会の人たち、区長、民生・児童委員、老人クラブ・婦人会・青年団の人たち
- ▶ 消防団員、防犯・防災班メンバー、見守り協力員、集落支援員、栄養改善員等
- ▶ 公民館、地区社協の人たち、地域サロンの人たち
- ▶ 支え合い・地域作りの自主組織関係者、ボランティア
- ▶ 子育てのネットワーク、子ども会、学童クラブの関係者
- ▶ 介護者の会・家族の集い・本人の集いの関係者
- ▶ 趣味・教室・スポーツ・娯楽の仲間
- ▶ ラジオ体操・散歩の会・犬の散歩の仲間
- ▶ まちの祭り・郷土文化の関係者
- ▶ 講、結い
- ▶ 同級生・同窓生



- ▶ 個人商店、商店会、商工会、おかみさん会
- ▶ コンビニ、コープ、スーパー、量販店、移動販売店
- ▶ 飲食店、ファミレス ▶ カラオケ店
- ▶ ドラッグストア ▶ 薬局 ▶ 鍼灸院、整骨院、マッサージ
- ▶ 理美容店 ▶ 書店、古本屋
- ▶ 新聞店配達、乳飲料配達、化粧品等訪問販売
- ▶ 郵便局、銀行、信用金庫、保険(外交員)
- ▶ 宅配業者、運送業者、引っ越し業者 ▶ ゴミ回収業者
- ▶ タクシー、バス、鉄道、トラック ▶ ガソリンスタンド
- ▶ (地元)企業 ▶ 工場、倉庫
- ▶ 農家、農協・漁協
- ▶ お寺、神社 ▶ ホテル・旅館
- ▶ 観光協会



民 産
学 官
本人・家族

- ▶ 医療機関、介護事業者、障害者関連機関、福祉関連機関、法律関連機関、等

- ▶ 保育園、幼稚園
- ▶ 小学校
- ▶ 中学校
- ▶ 高校
- ▶ 専門学校
- ▶ 高専
- ▶ 大学、研究機関
- ▶ 図書館、郷土資料館



- ・子どもたち・学生
- ・教員、学校職員
- ・PTA



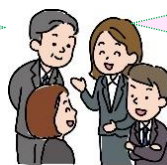
- ▶ 役所(様々な部署、窓口、出先機関)
- ▶ 地域包括支援センター
- ▶ 福祉事務所
- ▶ 保健センター
- ▶ 警察・消防(救急)



富士宮市の資料をもとに作成

そこなら、前の部署の時の
知り合いいるよ。

そこで今、同級生が
働いてるよ。



助かったあ！
今度つないで下さい！

一緒に話すと、仲間
の輪がつながっていくね。

B7. 仲間を増やす: 領域や世代を超えて

* この取組を、他の取組につなげて活かそう (主なもの)

→ B6. アクションミーティング

B3. 事務局・推進コアチームをつくる

B2. 統計の整備・実態の把握

→ A1. 広報・啓発

A2. 事前登録システム等

A4. 支援者登録システム等

A6. SOSネットワーク

A7. 模擬訓練

A8. アフターサポートシステム

3. 「見守り・SOS体制づくりのアクション(A)の展開

- ◆見守り・SOS体制を築いていくために、様々な取組があります（右ページの上の図のA1～A8のアクション）。
- ◆それらを、単発的（バラバラ）に実施していくのではなく、「本人が安心・安全に外出を続けられるために何が必要か」「本人が暮らす流れに沿ってどうつながっていけばいいか」本人の視点にたって取組（アクション）のつながりや全体を常に意識しながら体制づくりを進めていきましょう（右ページの下を図を参照）。
- ＊「普段の見守り」→「いざという時（SOS時）の早期発見・保護」→「保護後のアフターサポートと普段の見守り」という一連の流れ・循環を。
- ◆「見守り・SOS体制づくり」を、自治体・地域ですすでにある（現在育ちつつある）基盤を活かしながら、地域に根差した体制を、一年一年、着実に築いていきましょう。

「見守り・SOS体制づくり」の進め方のポイント

◆我がこととして、イメージや必要なことを共有しよう

「もし、外にでかけて場所や道がわからなくなったら…」
どんな取組をする場合でも、本人の身になって、何が必要か、どうあって欲しいか、関係者や地域のみんなと一緒に、【我がこととして考える】ことを、取組のスタートにしよう。



今日も、この町のどこかで…。
もし自分だったら、何があってほしいだろうか…。

◆A1～A8のどこからでもスタートできる。体制づくりの全体を俯瞰しながら、自地域の優先順位を話し合おう

今（今年度）はどこに注力することが、当事者に役立つ体制づくりになるか、地域で暮らす当事者や地域の実情をもとに、取組の優先順位やその後の展開について、関係者でよく話しあってから進めていこう。

＊特にすでに取組を行っている自治体や地域では、全体像に照らして話し合い、今やっていること・やろうとしていることが、本当に優先順位が高い取組なのか、他により注力すべき取組がないか、（再）検討してから進めていこう。

模擬訓練、盛り上がるから今年もやろうよ

そうだね。でも、実際に心配な人の支援が手薄。



一人でもいから行方不明の心配のある人の見守りのネットワークをつくりたいね。

個別支援ネットワークづくりに力をいれていこうと、提案してみようよ。

◆一連の流れの中で位置づけを確認しあって進めよう

最前線で実際に取り組む人たちに、全体観や今やろうとしている取組の位置づけを丁寧に伝えよう。

＊これをしないまま部分的な取組を進めると、その取組をこなすことが目的になってしまったり、やっておしまいになりがち。



なるほど！
なんでまた同じこと繰り返すのかって思ったけど、次につながるんだ。それならやるよ！

◆取組（アクション）をひたすらつなげる:全体的体制へ

取り組む際は、他の取組とつなげてやれないか、連動させる策をみんなで話し合ってみよう。

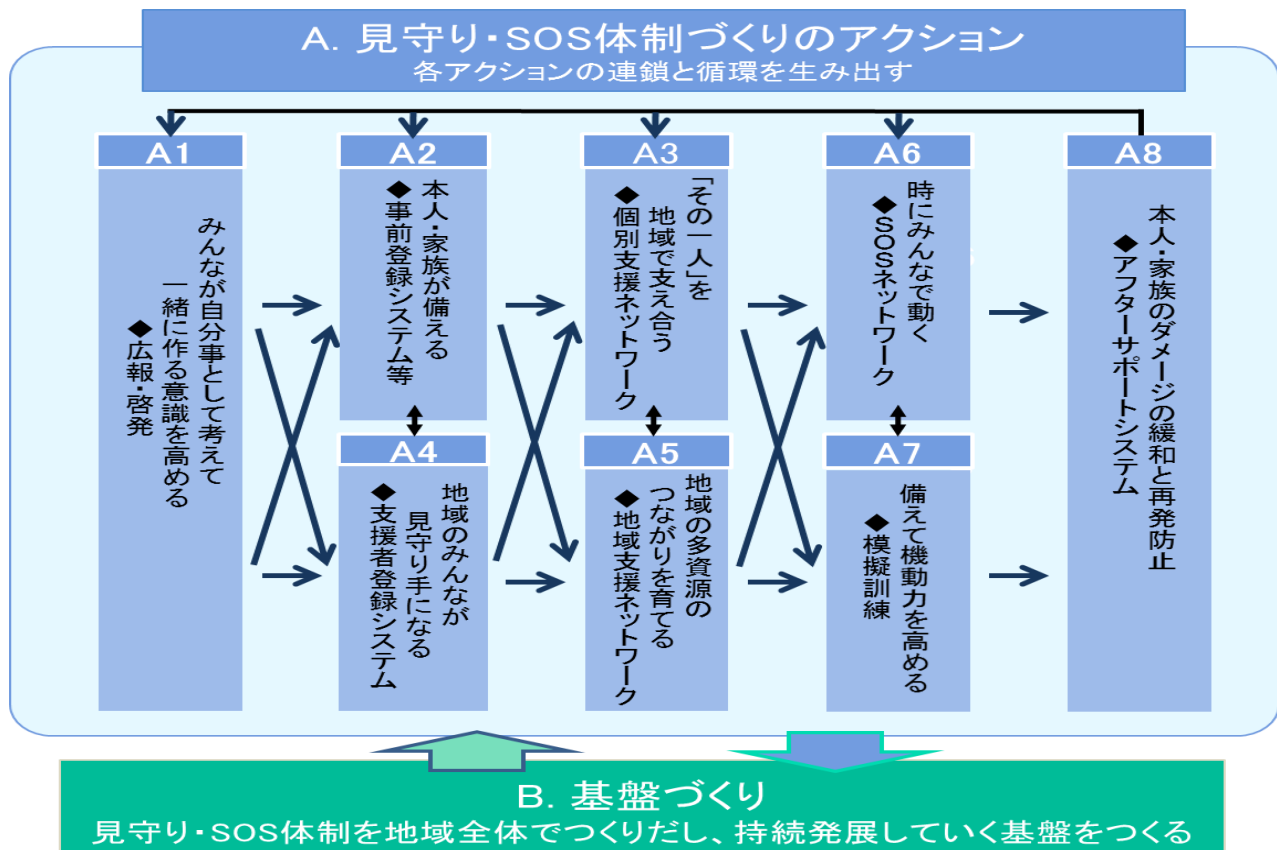
また、取組後は、やってみて生まれたことを、他の取組につなげて活かしていけないか、成果の還元策（循環）についても検討しよう。



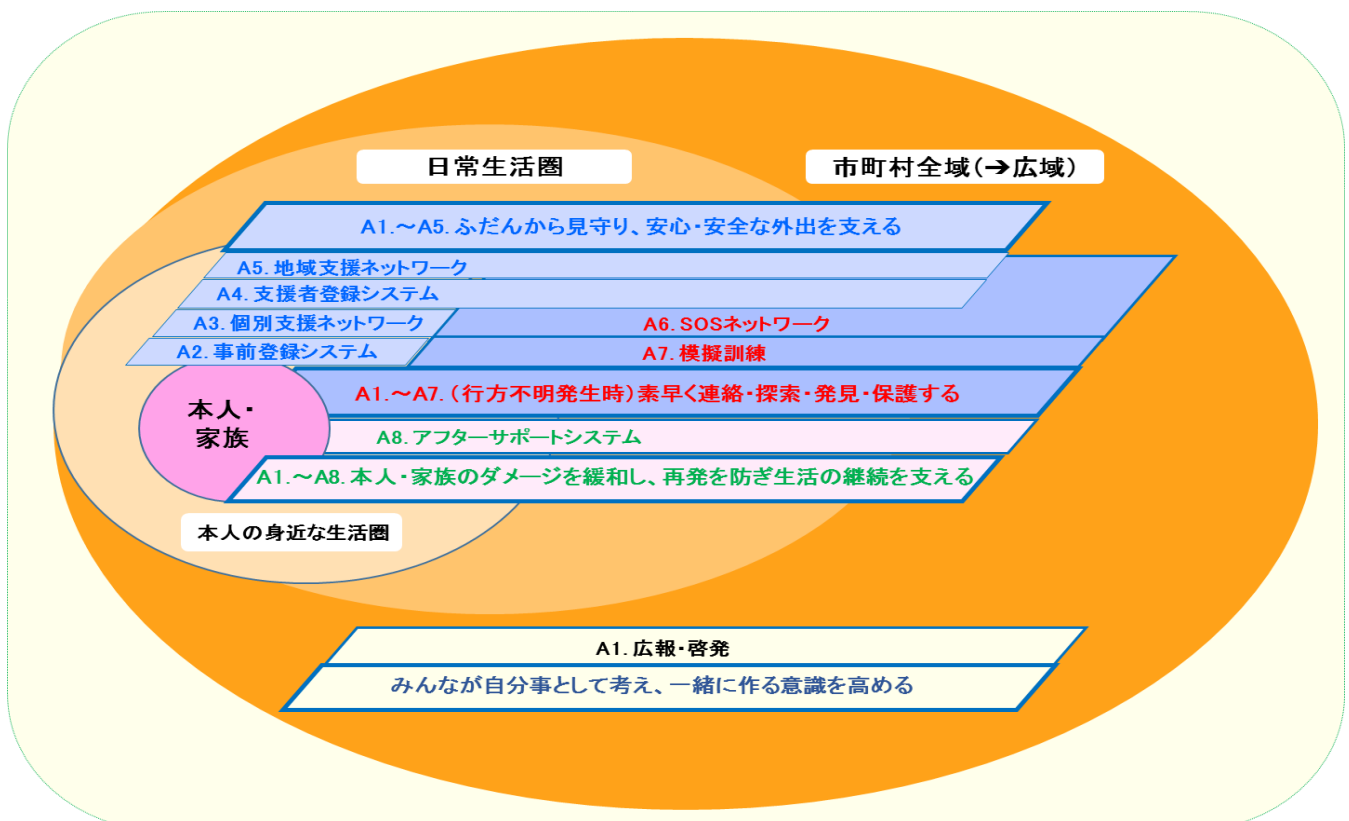
市が今年、それをやるならうちの店でも協力したい。職員も力になりたいと言っています。

多様な関係者で話し合うと、想像以上に取組のつながりが生まれる

「見守り・SOS体制」を築くための様々な取組(アクションA1～A8)
～地域にすでにある(育ちつつある)基盤を活かしながら～



地域で暮らす本人を見守り支える一連の体制をつくろう
普段からの見守り～SOS時の早期発見～保護後のサポートで安心・安全な町に





A1. 広報・啓発：みんなが自分ごととして考えて一緒に作る意識を高める

ねらい

- * 行方不明に関する体制づくりのねらいや取組の実際に関する情報を、地域の本人や家族、多様な人々に周知を図り、必要な人が支援につながるように、またより多くの人が体制づくりに参画するきっかけをつくります。
- * 他人事ではなく我が事として考え、本人・家族にとって真にやさしい体制をつくっていくための地域全体の意識を醸成していきます。
- * 体制づくりを、行政や一部の関係者任せにせず、地域の一人ひとりが一緒につくっていくこの大切さや可能性を伝え、地域の人たちの意欲や主体性を高めていきます。

メリット・期待されること

- ◆ 身近なところで行方不明が発生するかもしれないことを自分ごととして考える人が増える。
- ◆ 認知症の人等が、外出し続ける大切さを知り、過剰に危険視したり問題視せずに、日常の中で見守りやさりげない支援をする人が増える。
- ◆ 個別見守りネットワーク（A3）や地域支援ネットワーク（A5）、SOSネットワーク（A6）等実際に参画する人が増える（多分野、多世代で）。
- ◆ 地域の人たちの自発的・継続的な取組が進み、取組の連動、全体的な体制が生まれる。
- ◆ 行方不明にならずに安心して外出を続けられる人増える。家族や関係者の負荷が減る。

ステップ

1) 本人視点に立つて、広報・啓発の計画・作戦を見守り・SOS体制づくりには、多様な人たちへの広報・啓発が必要。下記を参照し拡充しよう。

□ 地域の多様な人たちに

- ・ 当事者になるかもしれない人たち（医療機関や介護サービスを利用している認知症の診断前後の人と家族）
- ・ 多世代の住民（中高年、子育て世代、子どもたち）
- ・ 医療機関（歯科等も）、薬局、介護事業所等の職員
- ・ 地元で働く多様な職域（商業、飲食、金融、交通、運輸、宅配、ガソリンスタンド、工事、農林水産他）
- ・ 学校・保育関係（先生、PTA、児童会、児童館等）
- ・ 行政関係者（担当以外の部署も、警察、消防、他）
- ・ 議員、首長

□ 地域の様々な機会を活かして

- ・ 認知症関連の講座、講演会、研修会、会議、説明会、相談（会）、懇話会、カフェ、当事者の集い等
- ・ キャンペーン活動（ラン伴、メモリーウォーク等）
- ・ 認知症関連以外の地域の多様な集まり（イベント、地域行事、季節の催し、総会、子供会等）

□ 届けたい人に行き届くために、様々な媒体を工夫して

- ・ 市町村の広報誌、ホームページ、通信、メール配信
- ・ チラシ、リーフレット等を配布、個別訪問で手渡し等
- ・ ポスター掲示、協力者の証のマーク掲示、のぼり旗
- ・ キャッチコピー入りの小物を作成・配布
- ・ 地元の新聞、テレビ、ラジオ等、メディアと協働
- ・ 口コミ、参加者自体が広報・啓発役に

2) 自分事として考え動き出すための内容・表現に

- 惹きつけ、前向きな関心を高める内容・表現の工夫を。
- 自分ごととして考えてみる内容や呼びかけを。
- ハードルを下げ、自分ができることに気づける内容に。
- 地域の動きや（小さな）成果を伝え参画の動機づけを。

ポイント

- ◆ 啓発・広報は、「ビジョン・共通方針（B4）」や「言葉・用語（B5）」と直結する。啓発・広報を行う前にそれらについて関係者であらためて確認し、広報・啓発にしっかりと反映させよう。

- ◆ これまで広く広報・啓発していたつもりでも、実際は限られた人にしか広報・啓発が行き届いていない場合も多い。

- ◆ 見守りを必要としている人や行方不明の心配のある人たちにとって、地域のどういう人たちの理解や協力があれば、安心・安全な外出につながるか、本人視点にたって広報・啓発すべき人たちを具体的に洗い出し、その人たちに行き届くための工夫を話し合おう。

- ◆ すでにある機会や場を、広報・啓発のために最大限活かそう。

- ◆ 認知症に関連のない場面でこそ、広報・啓発の威力が大きい。わが町で人が集まる様々な機会をとらえ、どんどん活かそう。その準備過程で関係者との新たなつながりが生まれていく。準備途上の話し合いを大切に。

- ◆ 地元の多世代、多様な人たちが、どんな媒体なら情報をキャッチしやすいか、地元の人たちに聞きアイデアをもらおう。

- ◆ 多様な媒体の活用が得意な人が身近にいる（行政職員、医療・介護職、地域の広報関係者、学生、他）。それらの人たちの力を借りよう。

- ◆ 行政目線ではなく、地元で暮らす当事者や取組に参画してもらいたい人の視点にたって、わかりやすく、やる気になる内容・表現になるようアイデアを出し合おう。

- ◆ 一人ひとりの存在や力が体制づくりに貴重であること、誰でもできることがあることを実感してもらえる内容を盛り込もう。

実例①

広報・啓発活動をとことん活かし、「地域の架け橋」をつくる 地元の人たちの思い・声を広報・啓発に活かす

(宮崎県高鍋町)

●「めざせ！認知症に優しい町・高鍋」を テーマにプロジェクトを立ち上げる

委員：認知症介護者のつどい関係者、民生委員、
婦人部会などの地域の方
地域包括支援センター、社会福祉協議会、
小規模多機能ホーム職員、ケアマネージャー



●資金集めを広報・啓発の機会に活かす



- ◆「目指したい町」の実現に向けて、活動団体、企業、一般市民に募金を募る
- ◆町が取り組もうとしていることへの関心・理解が広がる
→医療機関、住民等から 約66万円！

●啓発用マークを作成

- ◆「見守られているという安心感のなかで生活していただきたい」
- ◆地元のイラストレーターの協力を得て、わが町で目指したいイメージを広く伝えるための親しみやすいやさしいマークを作成



●啓発キャンペーンとして川柳場集

- ◆「みんなで架け橋をつくろう」という願いを込めて「認知症架け橋川柳」というネーミングをつけ募集。
- ◆20代から80代まで424作品が集まる！
- ◆受賞作品をシンポジウムで表彰。



●活動を通じてとらえた住民の思い・ことばをフルに活かして、啓発をさらに拡充



カラフルなのぼり旗を作成。
風になびくのぼり旗の川柳
を見て、関心を寄せる人た
ちが地域に増え、活動の呼
び水に。



川柳をプリントしたTシャツを作成
担当者・関係者が来て活動。
動く広告塔役になる。
出会う人たちが関心を持ち、
対話やつながりが広がる。

実例②

本人・家族の声と力を活かし、広報・啓発の方向づけとインパクトを高める

(福岡県大牟田市)

●体験や思い、願いを語ってもらう。語られた声を 資料化して活かす



- この町で商売をして働いてきた。
- 外に出て楽しみたい。
- わからなくなるけど、ちょっとした一声が本当にありがたい。
- みなさんがいてくれるから、わたしはこうして暮らせる。



- 声に触れることで、自分事としての真剣さが格段にアップ。
- 地域の大切さをリアルにアいる機会に
- 先延ばしではなく、自分が今動き出す必要性、普段の中で自分なりにできることを具体的に考える機会になる。

●本人が参画した共同アクション型の啓発キャン ペーン：本人と参加者が共に汗を流し啓発役に ～メモリーウォーク、ラン伴、等～



- 広報や啓発を紙面や講座等でやるだけでは、理解の深まりや支援者の広がりが伸び悩む。
- そのため、本人と参加者が、一緒に町にでて、啓発活動を共に行う取組を毎年続け、年々、参加者の層や年代が広がっている。
- 活動が盛り上がる中で、誰のためのなんのための活動かが形骸化しないよう、取組の前後に、本人がねらいや願いを参加者に呼びかける場面をつくっている。

A1. 広報・啓発

* この取組を、他の取組につなげて活かそう（主なもの）

→ B1. 本人・家族の声を聴く

B4. ビジョン・共通方針

B5. 言葉・用語

B7. 仲間を増やす

→ A2. 事前登録システム等

A4. 支援者登録システム等

A5. 地域支援ネットワーク

A6. SOSネットワーク

A7. 模擬訓練

A8. アフターサポートシステム



A2. 事前登録システム:本人・家族が備える

内 容

- * 行方不明になる心配がある本人・家族が、今後に備えて、事前に本人の特徴や連絡先、写真等を市町村等に登録しておき、普段からの個別の見守り体制やいざという時の迅速な発見活動に活かすための仕組みです。
- * 「A3. 個別支援ネットワーク」および「A6. SOSネットワーク」と連動させて整備することが重要です。
- 【体制づくりはこれから、という自治体】
「A2. 事前登録システム」と、「A3. 個別支援ネットワーク」「A6. SOSネットワーク」を最初から一連の流れとして企画し、部分から始める場合も一体的に考えながら進めよう。
- 【「A6. SOSネットワーク」のみ構築済みという自治体】
「A2. 事前登録システム」、「A3. 個別支援ネットワーク」の整備にも取り組み、SOSネットワークを効果も高めよう。
- 【すでに全体的なネットワークを構築済みという自治体】
必要な本人がつながり効率的に稼働しているか見直しを。
- * これまでは事前登録の必要性があまりなかったという自治体（小規模自治体であり顔や状況がわかっている、行方不明が発生していない等）においてこそ、見守り強化やいざという場合に備えて事前登録の仕組みづくりが必要です。
- * 独居や老夫婦世帯の増加、旅行等で出かけた先での行方不明、広域で探す場合等に備えよう。

メリット・期待されること

- ◆ 行方不明になる不安を抱えている本人・家族が早めに行政につながりやすくなります。
→ 早期に個別支援の相談や個別支援ネットワーク作りを進めることが可能となり、本人・家族が行方不明になる不安を減らし安心・安全に地域で暮らし続けられる効果が期待できます。
- 合わせていざという時にスムーズに連絡や発見活動を行うためのSOSネットワークとのつながりや具体策を整えることが可能となり、早期・無事に発見する効果が期待できます。
- ◆ 行政が、行方不明になる不安を抱えている本人・家族を早めに把握しやすくなります。
→ 該当者の存在や状況に関する情報の把握を通じ関係機関（警察、地域の支援機関や支援者）との情報共有や具体的な話し合いが可能となり、普段からの見守りやSOS時の発見活動を効率的に進められるようになります。（広域での発見活動も含めて）
→ 行方不明件数の減少、発見時間の短縮、無事に発見できる数の増加が期待できます。
- ◆ 行政が、行方不明のリスクのあるケース数や実態、自治体内での分布等を把握可能になり、行方不明の未然防止やSOS時の体制づくり、安心して暮らせる地域作りを計画的に進める基礎になります。

ステップ

- 1) 現状分析と事前登録システムのイメージづくり
 - 現状分析：行方不明の心配のあるケースの現状（本人・家族の願いや力も含む）、対応状況、課題
 - ネットワークのイメージづくり:見える化
 - ・ めざしたい姿、目標、システムのあり方
 - ・ システムの流れ・全体像
 - ・ 主となる機関、参画が望まれる資源、協力依頼先
- 2) 必要な取決めや書類等の検討・整備
 - ・ 実施要綱・登録様式（事前登録内容を含む）
 - ・ 連絡様式、台帳等、周知チラシ（対象別）
 - ・ 登録する本人・家族への配布物 等
- 3) 説明・登録の促進、広報
 - ・ 主な関係者に出向いて説明、登録の呼びかけ依頼
 - ・ 特に利用して欲しい人・家族への丁寧な説明と合意
 - ・ 広報（広報誌、チラシ配布、ポスター掲示、自治体のホームページに掲載、講座・研修等で説明等）
- 4) 報告・共有、定期的な見直し（最低年に1回）
 - ・ 登録数、登録ルート等を関係者と共有。登録者や関係者の声をもとにシステムの改良を。

ポイント

- ◆ 主な関係者と実情を踏まえて話し合いを重ねながら（例）警察、民生・児童委員、区長、医療・介護関係者、当事者組織、成年後見の関係者、等
- ◆ 無理や無駄のない実質的なネットワークにしていくためには、地域で暮らす本人・家族の視点に立ちながら、検討やシステムづくりを進めることが肝心。
- ◆ 話し合いを記録に残し、重要事項を明文化したり、わかりやすい図にして、見える化していこう。
→ ネットワークを稼働させていくために必要な書類や物を上手く、一つ一つ整備していこう。
- ◆ 他地域情報を参考に：自地域にあった応用を
- ◆ 本人・家族にわかりやすく、「登録しておけば安心」「これは役立つ！」とメリットが伝わる説明・広報を
- ◆ 「行方不明になる心配がある人」と接する機会が多い関係者・機関やその集まりには出向いて丁寧に説明。加えて、現場の情報、システムが役立つためのアイディアをよく聴き、システムに具体的に反映を。
- ◆ 登録状況を毎月確認。必要な人の登録が着実に増えていくように、改良点を多様な関係者とともに検討を。

実例①

見守りネットワークとSOSネットワークの一体的な構築を進める ～市町共通のシステム・標準書式等を提供：広域対応の強化としても～ (兵庫県)

※管内市町の多様な取組を参考に、できるだけわかりやすくする工夫を重ね、イラストやフロー図を作成。

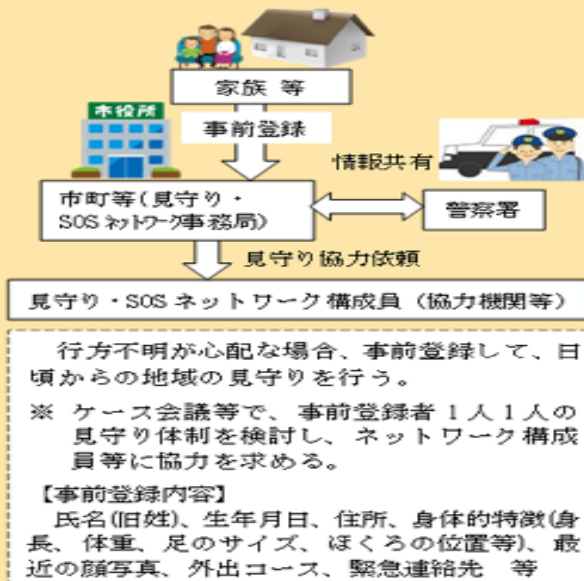
★考え方やフロー図、要綱や事前登録の説明文、書式、チラシ等の雛形を、県のホームページに掲載。

<https://web.pref.hyogo.lg.jp/kf05/documents/mimamorinetowa-kuzu.pdf>

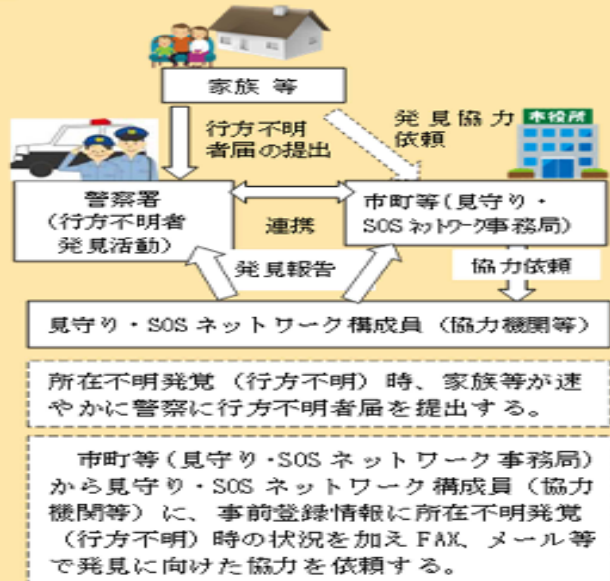
★事前登録用紙の中に、利用者の情報をどこに提供しどのように活かすかの説明文をいれ、丁寧な意思確認を促す。

■認知症高齢者等の見守り・SOSネットワークのイメージ (①②の両輪)

①行方不明未然防止につながる見守りネットワーク



② 早期発見に取り組むSOSネットワーク



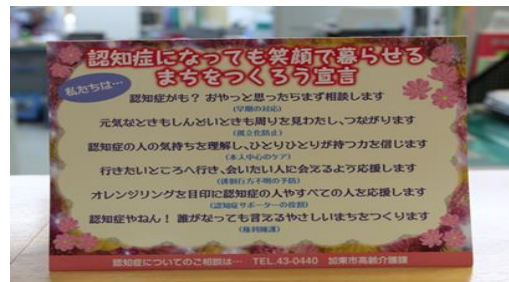
実例②

本人・家族の視点にたって、やさしく登録しやすいしくみやツールをつくる (兵庫県加東市)



◆登録しやすくなるよう工夫したキット

わかりやすいマニュアルや個人票のほかに、蛍光ステッカー、キーホルダーやペンライト、体験者のひと言集等、本人や家族の関心を喚起し、もらって嬉しいグッズを透明ポーチにワンセットにした「加東市ひとり外出見守りネットワークキット」を手作り。登録して欲しい人に手渡し、説明しながら登録を勧めている。



◆カラフルでやさしいポップを作り、広く呼びかけ

「認知症になっても笑顔で暮らせるまちをつくろう宣言」を親しみやすく描いたポップを手作り、当事者や様々な人たちの目に触れやすい場所に設置し考え方を広げる。
【行きたいところに行き、会いたい人に会えるように(行方不明の予防)】という一文を明記。本人や家族が事前登録に一步踏みだす後押しになっている。



A2. 事前登録システム

※この取組を、他の取組につなげて活かそう(主なもの)



B1. 本人・家族の声を聴く

B4. ビジョン・共通方針

B5. 言葉・用語

B7. 仲間を増やす



A1. 広報・啓発

A3. 個別支援ネットワーク

A4. 支援者登録システム

A5. 地域支援ネットワーク

A6. SOSネットワーク

A7. 模擬訓練

A8. アフターサポートシステム



A3. 個別支援ネットワーク:「その一人」を地域で支え合う

内 容

- * 事前登録を行った一人ひとりについて、普段から地域で見守る体制や方策を、本人・家族とともに関係者で検討し、それらの強化を着実に図っていきます。
- * いざという場合に備えて、「その一人」の連絡や探す体制、探し方等を予め検討し強化を図ります。
- * 登録制度の有無や登録しているか否かに関わらず、行方不明が懸念される人に関して一人からでも、普段からの見守りとSOS時の体制・方策を検討し、個別支援ネットワークを一つ一つ育てていきます。

メリット・期待されること

- ◆ 「その人」のための個別の見守り・SOSネットワークが生まれ、普段からのつながりや関わりが広がり、本人や家族の安心感が高まり、行方不明未然防止やいざという時の迅速な早期発見を期待できます。
- ◆ 認知症サポーターや地域の人たちが個別支援ネットワークに参画し、見守り手として日常的に活躍する人たちが地域の中で増えていきます。
- ◆ 個別生活支援ネットワークが一つ一つ育つことで、地域全体の見守り・SOSネットワークの実効力が高まっていきます。

ステップ

1) その人がもつ地域のつながりの把握・見える化

- 本人の話をよく聴きながら、つながりを一つひとつ把握。* 本人と関係を作りながら少しずつ

例：本人が行きたい場所、会いたい人
地域の中のなじみの人や場所
よく行く場所、そこで出会うひとたち
日々の暮らしの中で接点がある人や場所
行きたいと思っている場所、会いたい人
かつてよく行っていた場所、懐かしい場所

* 本人と一緒に地域を歩いてみるのが効果的。

- 家族や関係者とネットワークを育てる目的や意義を確認しながら、本人のつながりの情報、協力を願えそうな人の情報を補強する。
- 上記の情報を本人が住む場を中心にマッピングし、本人と資源とのつながりを線でむすぶ等、本人の「つながりマップ」を作る。

2) 個別支援ネットワークを作る

- 本人、家族、関係者と「つながりマップ」をもとに、ネットワークに入ってもらいたい人について話し合い、リストアップする。
- それらの人のところに出向き、日常の見守りや声かけ、何か気づいた時の連絡をお願いする。
- 了解が得られた人のネットワーク名簿を作成。
 - * 共有の範囲は、本人・家族、関係者で相談。
 - * 警察とも個別支援ネットワークの情報共有。

3) 個別支援ネットワークを育てる、手入れする

- 集まれる人が短時間でも集まり、本人の話を聴いたり、情報や意見を話し合う機会を作る。
- 定期的・随時、本人、家族、ネットワークの人たち、本人が利用する介護・医療関係者の話を聴き見守りや関わり方、連絡等の改善を図ろう。

ポイント

- ◆ その人になじみのない人たちによる新たなネットワークを作ろうとするのではなく、その人が有するつながりを丁寧に把握し、本人固有のネットワークを育てて活かしていくことが重要なポイント。
- ◆ 一人ひとりが、その人ならではの地域とのつながり（自己資源）を想像以上に豊富に有している。
- ◆ 単なる資源ではなく、一つ一つは本人にとっての意味があり、安心や喜び、活力、自分らしさの源。本人にとってのエピソード等を聴きながら把握を。
- ◆ 数の多少でなく、とらえられた資源を着実に活かそう。
- ◆ 家族がもっている地域とのつながり（親しい人等）が、本人の見守り手として大活躍する場合もある。
- ◆ 「つながりマップ」を本人とともに楽しみながら作ることができると、ネットワーク作りが進みやすい。
- ◆ 場所や人の写真を撮りマップに貼る工夫をしている例もある。

- ◆ 本人が出かける方面や道筋別にネットワークに加わってもらいたい人をリストアップしていこう。
- ◆ 本人が出かける方面等によっては、つながりの空白地帯が見つかる場合も少なくない。その地帯に何か資源がないか話し合おう。必要に応じ協力の呼びかけを。
- ◆ 可能な範囲で本人、家族、相手となじみの人と一緒に外出して依頼をすることが効果的。
- ◆ さりげない見守りや声かけが本人の安心・安全な外出の支えになることを丁寧に説明し了解を得よう。
- ◆ 少人数からでもスタートし、徐々に協力者を増やしていこう。

- ◆ 本人を中心に関係者がゆるやかにつながりながら、「この人が安心・安全に外出を続けられるように一緒に」という共通意識を育て、関係者の労をねぎらいつつ、よりよい見守り策や連絡の仕方等の工夫を一緒に重ねていこう。

実例①

「一人」を大切に安心・安全の個別支援ネットワークを育てる
～「ケアマネジャー用の手引き」を作り一人を丁寧に支える～（静岡県富士宮市）

★「認知症でも安心して散歩や買い物ができる町をめざして！」ケアマネジャー向けの手引きを作成。

<http://www.city.fujinomiya.lg.jp/citizen/Ilti2b00000011dp-att/Ilti2b0000004qli.pdf>

★ケアマネジャーの認識を高め、地域住民の力を借りて個別の支援ネットワークを作りあげていく参考手順を紹介。

「見守りお願いマップ」を作ってみよう！！

認知症の方が「安心して出歩ける」ように、ご近所の方にちょっとした見守りをお願いしよう！！

見守りお願いマップ作成の手順

- まずは、家族にマップ作成の同意を得よう！！
 ◎認知症という病気の性質を正しく家族に伝える。
 ◎日常生活の中でご近所さんのちょっとした見守りが大切なことを家族に知ってもらおう。
- 本人の散歩や外出を見守ってもらうご近所さんを探そう！！
 ◎家族から本人の情報を聞き取る。
 ◎家族やヘルパーさんたちと本人の行動範囲を一緒に歩いてみて行動パターンを知る。
 ◎協力や支援してほしい人の目安を決める。
- ケア会議で今後の支援体制を検討しよう！！
 ◎ケア会議の前に、会報に召集するメンバーを検討する。
 家族・ケアマネ・事業所・包括支援センター・地域型支援センター・民生委員（区長・町内会長）等
 ◎自宅周辺の地図から、見守りをしてもらえるような支援者宅（ポイント宅）を検討する。
 宮バス・介護保険事業所・お店・キヤラ・コンビニ・認知症サポーター・店舗等に見守りをお願いすることも検討しよう。
- 「見守りお願いマップ」を作ろう！！
- 支援者宅にマップを持ってお願いに行こう！！

定例的に支援者宅（ポイント宅）の様子を伺おう
 ■ 支援者宅は、日常の中で本人が元気に安心して出歩けるように見守っていただいています。必要に応じて見守りの様子を伝えていただきながら、感謝の心を伝えよう。
 ■ 本人の持ち物に名前を付けたら、行方不明時の対応として徘徊探知器（GPS機器）を所持させるなど、自分たちでできる備えはしておこう。
 （市の後援者や在宅生活継続支援サービスも利用しよう。）
 ■ お見守りマップの配布先を把握しておこう。

地域のみなさまの温かい見守りをお願いします！！

作成者 富士宮市包括支援センター

みなさまへお願い
 ご近所に、～こんな～ 認知症の方がいます。
 認知症は脳の病気で、体調が悪くなったり、怪我をしたり、家までの道がわからなくなったりした時、自分ではどうすることもできなくなることがあります。
 この方が、この地域で一日でも長く安心して出歩けることができるように、地域のみなさまの温かい目と見守りにご協力をお願いします。

本人の写真	氏名	
	住所	
	本人の特徴	
	年齢	性別
	身長	体格
	髪型	
	服装	
	特徴	
	行動パターン	
	徘徊歴	
会話		
備考		

本人が歩場所の地図

【緊急連絡先】
 ※本人が困っているような時は、下記までご連絡ください。
 家族
 氏名 携帯：
 ケアマネジャー
 氏名 携帯：
 事業所 連絡先：
 富士宮市地域包括支援センター
 連絡先：22-1591
 地域型支援センター
 連絡先：
 サービス事業所 連絡先：
 連絡先：

実例②

地域型の地域包括支援センターの認知症地域推進員が連携調整役になり
情報共有しながら必要な人と認知症サポーターを結び、共に見守る（群馬県高崎市）

見守り活動確認票

記入日	28年 3月 15日	記入者氏名	群馬 高子
氏名	タカサキ ハナコ	生年 月 日	明治・大正・昭和 10年 10月 10日 (80) 歳
住所	〒510-1 高崎市高井町 35-1	電話番号 (027)	321-1319
緊急連絡先 ①	氏名 高崎 次郎	性別	男・女
緊急連絡先 ②	氏名 高崎 次郎	性別	男・女
緊急連絡先 ③	氏名 高崎 次郎	性別	男・女

※本人・家族が希望する見守り活動の内容を具体的に記載・共有

Step1 見守り対象者の把握

地域型センターやケアマネジャーが状況把握を行う。

Step2 導入の可否の検討

地域型センターが情報収集し、本人・家族の要望を確認して、※1「見守り活動確認票」を作成する。それに基づく見守りの導入に向けての判断を行う。

Step3 活動内容の検討

地域型センターの認知症地域支援推進員がオレンジサポーターとの連携調整を行い、見守り活動の内容と見守りの実施体制の検討、担当者の選定を行う。案をケアマネジャーに伝える。

Step4 活動内容の調整・確定

担当ケアマネジャーは、調整後に確定した見守り活動をケアプランに位置づけ、地域型センターに報告する。地域型センターは、担当するオレンジサポーターに伝え、※2「見守りプラン」を作成する。その他に、民生委員等関係者にも報告する。

全国合同セミナー（平成29年9月：東京センター）file:///C:/Users/kumiko/Downloads/th29_goudousemi_2nd_all%20(1).pdf



A3. 個別支援ネットワーク

* この取組を、他の取組につなげて活かそう（主なもの）



B1. 本人・家族の声を聴く

B4. ビジョン・共通方針

B5. 言葉・用語

B7. 仲間を増やす



A1. 広報・啓発

A2. 事前登録システム

A4. 支援者登録システム等

A6. SOSネットワーク

A7. 模擬訓練

A8. アフターサポートシステム



A4. 支援者登録システム：地域みんなが見守り手になる

内 容

- * 普段から本人をゆるやかに見守り、いざという時に、可能な範囲で一緒に探してくれる多様な立場の見守り手を着実に増やしていくために、協力を呼びかけ登録してもらう仕組みを作ります。
- * 登録の前後で、認知症の人への理解や安心・安全な外出を見守る必要性、見守り手としてできることや配慮等を学ぶ機会等を作り、登録をきっかけに各自が普段の中で無理のない見守りを実行していくことを促進します。
- * 登録してくれた人にネットワークの継続的な情報提供や関連の事業等への参画・協力の呼びかけを行い、登録によるつながりを、ネットワークの拡充や様々な関連事業の実効性を高めるために、最大限活かしていきます。

メリット・期待されること

- ◆「安心・安全な地域にしていけるために、何か関わりたい、役に立ちたい」と思っている、きっかけがないために活躍できていない人たちが地域に多数潜在しています。
「自ら登録するしくみ」をきっかけに、見守り手として日常の中で実際に活躍できるようになる人が増えていきます。やさしい地域づくりの一つのバロメーターにもなります。
- ◆日常的な見守り手が増えることで、本人・家族の安心感や外出のしやすさが高まります。
- ◆日常的な見守りの体験を重ねることで、いざという時に一緒に探す実効力が高まります。
- ◆行政や地域包括支援センターが、地域の中で自発的に活動をしたいという人たちの数や状況を把握することができるようになります。見守り体制や関連事業の展開のための貴重な人材として活躍が期待されます。
- ◆登録数が伸びない地域を把握でき、小地域の状況に応じた対応策の立案や、焦点を置く地域や職種等を明確にして取組を効率的に進めていきます。

ステップ

1) 協力を呼びかける人たちを脱領域でみつける

- B7. 仲間を増やす：領域や世代を超えて（p. 25）も参考にしながら、地元で協力を呼びかけたい多種多様な人たちをリストアップする。
- 見守りを必要としている本人や家族、その支援者ともよく話し合い、実際に外出のために、どこでどういう人たちの見守りがあってほしいか呼びかける人たちをより具体的にしていく。

2) 必要な書類等の検討・整備

- ・実施要綱・登録様式、台帳等
- ・周知チラシ（対象別）
- ・登録する協力者の証 * バッジ、ステッカー等

3) 説明・登録の促進、広報

- ・関係者に出向いて説明、登録の呼びかけの協力を依頼。別分野のイベント時もチャンス
- ・特に協力して欲しい人や機関への丁寧な説明と合意
- ・広報（広報誌、チラシ配布、ポスター掲示、自治体のホームページに掲載、講座・研修等で説明等）

4) 報告・共有、定期的な見直し（最低年に1回）

- ・登録数、登録ルート等を関係者と共有。登録者や関係者の声をもとにシステムの改良を。

ポイント

- ◆ 思いがけない人も、登録の呼びかけで貴重な見守り手として活躍する（次ページ参照）。
- ◆ 数を増やすことを焦らずに、「本人からみて実際に必要な見守り手」が増えていくように、本人の視点に立ち、本人や家族らの声を聴きながら、あらためて地元にいる人たち、ある場所を丁寧に見つけなおしてみよう。
- ◆ ICTを活用した登録の仕組み作りも広がっており、特に若い世代の見守り手を増やすために効果をあげている。
- ◆ 一方で、ICTを活用しきれない人たちもかなり多数おり、今実際に見守り手になって欲しい地元の人たち実情や声をよくとらえて、わかりやすく登録しやすい方法や内容の工夫が重要。
- ◆ 協力者の意識を高め、実際に見守りや声かけをしやすくするための協力者の証（バッジ、ステッカー等）を当事者や関係者と共に工夫しよう。
- * **証があると、本人や家族も「ちょっとお願い」等の一言が言いやすくなり役立つ。**
- ◆ 登録（予定）者には、認知症サポーター講座や関連の集まり、模擬訓練等への参加を継続的に呼びかけ、理解と実効力を高めていこう。
- ◆ 登録者の中には、すでに大小様々な見守り等を自主的に実践している人がいる。登録の呼びかけの際、そして登録後に各自が実践している具体的情報を把握し共有することに力をいれよう。

実例①

「わんパト隊」を結成。日々の自然体の見守りが地域に根付く
～地元にある小さくて大きな力を発見し、体制作りに活かす～

（岩手県矢巾町）

- * 認知症の人にやさしい地域づくりを推進する「やさしさはばたく認知症支援ネットワーク」を立ち上げ、その中に認知症の人の行方不明の予防と早期発見のしくみづくりに継続的に取り組む
- * 「安心安全おたすけ部会」を設置。自然体で無理のない見守り手として犬の散歩仲間に着目し仲間を通じ呼びかけて、「わんわんパトロール隊」（通称：わんパト隊）を結成。
- * 入隊の証として、携行できる「犬の骨」型のチャームなミニプレート配布。
- * 日々のさりげない見守り役、気づきを行政に連絡、行方不明者の早期発見等で大活躍中。



入隊時：「認知症サポーター養成講座」受講
活動・愛犬との散歩時の見守り活動
・月1回の情報交換会
・年に1回は全員で認知症に関する勉強会



見守りをしている人たちの
声を集め、活動の周知や
新たな隊員確保の呼び水に。

今まで認知症について
考えたこともなかったし
他人事と思っていましたが、
小さなことから始めること
ができる、人の役に立つこと
ができる、と感じました。

わんパト隊員が、
見守っている本人の
担当者会議に参加し、
ケアプランにも記載
されるようになりました。

実例②

当事者の事前登録と「おかえりサポーター」の登録を、
ねらいを丁寧に伝えながら着実に広げる

（新潟県燕市）

- * 若年性認知症の人の交通死亡事故や、『誰にも迷惑をかけたくない』と暮らしていた老夫婦の願いを無にしないよう、当事者の事前登録と合わせて、一人でも多くの市民が自分ごととして見守り手（おかえりサポーター）として登録をするしくみ「認知症高齢者等見守り事業（おかえりつばめ〜）」を実施。



シンボルマークのシール
車の窓ガラス用もある。
* 運転中は動くPR役

- * 市の防災や子育て支援等のメール配信のしくみを活かした情報管理・伝達システム（※）だが、監視にならないように、日頃からの緩やかな見守りを育むしくみとして普及を図っている。

※新潟県警察が行っている「はいかいシルバーSOSネットワーク」と連携して、行方不明者情報を「おかえりつばめ〜」として配信。

- * 数を増やすことを焦らずに、認知症地域支援推進員等が、関係者のところに出向いてねらいや協力依頼を丁寧に伝えている。

現在、当事者の事前登録が13名、おかえりサポートは、
個人・企業あわせて600に上っている。

「おかえりサポーター」は、市役所の窓口や地域包括支援センターで登録申請書を受け付けている他、市のホームページからweb登録、携帯・スマートフォンからの登録も可能で、若い世代や企業の登録が広がっている。

「おかえりサポーター」登録申請（市のHPより）

項目名	入力内容
氏名 必須	「半角」
氏名(カナ) 必須	「全角カタカナ」
住所 必須	「全角」
電話番号 必須	
メールアドレス (再入力あり)	
燕市認知症関連情報メルマガ 必須	どの情報を配信いたします。

市が月1回程度配信している認知症関連情報のメルマガの配信希望の有無も確認

個人情報の取り扱いに関する留意点を確認し、誓約をする。

<http://www.city.tsubame.niigata.jp/about/08000682.html>



A4. 支援者登録システム

* この取組を、他の取組につなげて活かそう（主なもの）



B1. 本人・家族の声を聴く

B4. ビジョン・共通方針

B5. 言葉・用語

B7. 仲間を増やす



A3. 地域支援ネットワーク

A3. 個別支援ネットワーク

A1. 広報・啓発

A6. SOSネットワーク

A7. 模擬訓練

A8. アフターサポートシステム



A5. 地域支援ネットワーク:地域の多資源のつながりを育てる

内 容

- * 地域の中で見守り活動やSOS時の発見活動に参加している人たちや参加してみたいと思っている人たちはかなりの数に上ります。一方、数は増えても、お互いがお互いの存在を知らなかったり、日頃からのつながりがないままだと、活動や協働が拡充していきません。
- * 見守り・SOSネットワークに参加する多様な立場・職種（多資源）の人たちが知り合い、互いの理解や関係を少しずつ深めながら、普段から地域で支え合う地域支援ネットワークが育っていくよう、働きかけが必要です。
- * 現在各地で、下記のステップ欄にあるような多彩な働きかけが行われています。ネットワーク参加者の主体性を第一に、地域の実情に応じた企画をたてながら、継続的な働きかけをしていきましょう。

メリット・期待されること

- ◆ ネットワークに参加（登録）している多様な立場・職種の人たちが、普段から知り合い、つながりあう機会を意図的につくっていくことで、日常の見守りや地域での支え合いが活発になります。
- ◆ SOS時の連携がスムーズになり、早期発見に向けた個々の動きや協働の機動力が高まることで期待されます。
- ◆ 多様な立場・職種の人たちがつながっていくことで、これまで解決ができずにいた課題を乗り越えていく解決力が高まります。
例：一人暮らしの認知症の人の見守り
交通機関を利用する認知症の人の見守り
休日や夜の見守り 等
- ◆ 普段からの地域支援ネットワークが育つことで、本人や家族と同時に、ネットワーク参加者自身の地域の中でのつながりが豊かになり暮らしやすくなります。

ステップ

1) ネットワークに参加している人たちの体験や思い、ニーズを知る

- ☐ その人たちに会えた時、意識して話を聴く。
- ☐ できるだけその人たちが働いているあるいは過ごしている現場に足を運んで話を聴く。
- ☐ (簡単な) アンケート票を作り、ネットワークに参加（登録）している人たちの体験や声を集める。

【把握しておきたい点】

- ・ 認知症の人との普段の接点や関わり
- ・ 日頃の見守りやSOS時の活動体験、不安や困りごと、うまくいったことやよかったと思うエピソード、工夫
- ・ これからやってみたいこと、つながって一緒にやってみたい人、そのために必要なこと、等

2) 地域支援ネットワークが育つための企画を立て動く

- ☐ 1) で把握したことをもとに、ネットワークの参加者同士でつながっていくために、今、何があつたらいいか、何からどのように始めていくことができるか、関係者で話し合い具体化を。

【参考】各地での取組の例

- ・ 互いの情報共有や対話の促進のための通信の発行やメーリングリストを活用した最新情報のやりとり
- ・ 出会いや関係作りのための集いや交流会、懇親会
- ・ 活動経過を共有しながら、悩みや知りたいことについて話し合うネットワーク会議や検討会、学習会
- ・ 一緒に一つのことに取り組む合同イベント
* 模擬訓練もこの一つ (p.41~42を参照)
- ・ 見えにくい活動や成果等を、参加者同士で伝え合い地域の人にも広く発信する報告会

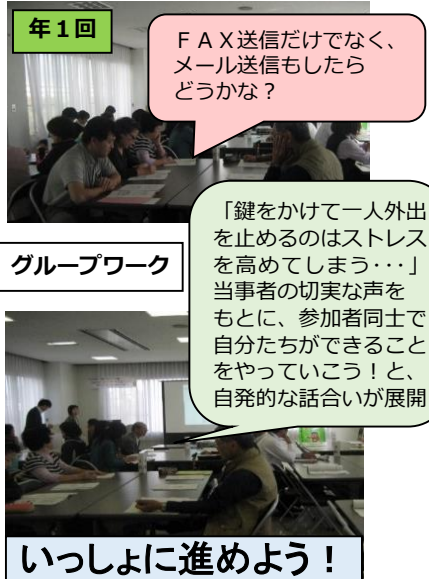
- ☐ 小規模でも、できることから実行。
- ☐ 内容や方法の工夫をしながら、できる範囲で、とにかく続けていくことが重要。

ポイント

- ◆ ネットワーク参加者のことをよく知ること自体が地域支援ネットワークづくりの大事な一步。
* せっかく会っているのに、ネットワークに参加（登録）している人の声を聴けていない場合も多い。アンテナを立てて声を集めよう。
- ◆ 人口規模が大きかったり、面積が広い等、現場の人たちの声を把握しにくい場合、より地域に近いところにいる人と協力して声を集める流れやフォーメーションを作っていこう。
- ◆ 地域の中で、すでに見守りや（水面下で起きている）SOS時の関わりをしている人もいる。それらの実際や気づき、小さな成功体験も丁寧に把握していこう。
- ◆ ネットワークに参加（登録）している人たちの中から少数でも参加してもらい、企画を一緒に立てていこう。
あるいは参加者に自主企画を呼びかけよう。
* 支援者だけで盛り上がりすぎず、「本人・家族が安心・安全に地域で暮らすために」というねらいを大切に。
* その人たちの「○○をしたい」「○○なら、できそう」という主体的な声を大切に活かそう。
* 「自分ごととして」「一緒に楽しく」が、つながりや活動が拡充していく鍵。
- ◆ 一部の人のみで進めず、ネットワークの参加者や関係者に企画案を伝え、実行に協力してもらえ人を少しずつ増やしていこう。
* 得意なこと、やれる力を少しずつ出し合いながら「やってみる」中でつながりや次の展開がみえてくる。
* 何をする場合でも「脱領域」（p.26を参照）で。地域で支え合う仲間を、地域にいる幅広い領域の人たちに広げていこう。

実例① 「ひとり外出見守り・SOSネットワーク会議」を公開で開催 ～一人ひとりの声と思い、力を大切にネットワークを拡充～ (兵庫県加東市)

- * 見守り・SOSネットワークの参加者と共に、市民が誰でも参加できる会議を毎年開催。
- * 率直な意見やアイデアをもとに、つながりや活動が広がっている。



【それぞれの役割を確認】 * 互いの強みを活かしながら、一緒に動こう

市高齢介護課
・市民への認知症の正しい知識や対応についての啓発活動 ・キャラバン・メイトの養成および活動支援 ・認知症サポーター養成講座の開催により認知症サポーターの育成・活動支援 ・徘徊高齢者の実態調査（介護認定結果など） ・介護支援専門員に対する支援（認知症・徘徊高齢者など困難事例） ・ひとり外出見守りネットワーク個人票台帳管理（登録・削除・関係機関への連絡）および徘徊発生時の連絡
介護支援専門員（介護認定を受けていない場合は、地域包括支援センター職員）
・ひとり外出・徘徊高齢者などについての情報収集とアセスメント ・当事者への本ネットワークの説明および同意 ・個人票によりケアカンファレンスを実施。会議を通じて、利用している介護サービス事業所や関係機関と情報の共有を図る
介護サービス事業者
・日常業務を通じての当事者の外出の状況の見守りや立ち往生時の声かけ ・日常の外出の範囲を超えるなどの異常を察知。必要場合は、家族や担当介護支援専門員への連絡を行う
市社会福祉協議会
・小地域福祉活動の普及・啓発 ・ボランティアの育成・支援 ・介護支援専門員が実施するケアカンファレンスへの出席 ・個々のケースにおいてネットワークでの見守りや協力体制を当事者ととらえつづける
民生委員・民生協力委員
・地区でのひとり外出高齢者や徘徊高齢者の把握や相談活動・行政へのつなぎ ・地区での当事者見守り活動の支援（近隣への見守りの普及）地区内連絡調整
区長 老人クラブ 女性団体 消防団 商工会等の組織
・認知症についての正しい知識の普及啓発・認知症サポーター養成講座・学習会の開催 ・日頃の見守りや声かけなど対応の実践を学ぶ機会づくり・徘徊模擬訓練 ・地域での当事者を見守る体制づくり・ひとり外出見守りネットワーク個人票登録への協力
市防災課 TEL43-0402
・家族の希望により、かとう安全安心ネットの活用およびCATV放送

実例② 地域で地道に取り組まれている活動に光をあて、通信で紹介 ～見守りネットワーク通信を継続的に発行、ネットで閲覧可～ (東京都目黒区)



- * 見守り活動を実際にやっている人たち、見守りを受けながら地域で暮らし続けている本人、裏方で支えている人たちの姿と声を生き生きと伝えていきます。地域に根差した情報が、つながりや活動のヒントとして役立っている。

- * 目黒区高齢者見守りネットワーク(愛称「見守りめぐねっと」)の活動をまとめた通信を継続的に発行しています。
- * 町会回覧、参加団体、区の主な施設で配布すると同時に、バックナンバーを区のホームページにPDFで掲載し、身近な見守り活動の最新情報を幅広い人々と共有

http://www.city.meguro.tokyo.jp/kurashi/korei_fukushi/megnet_tuusin/index.html



通信第15号(平成29年7月発行)より



A5. 地域支援ネットワーク

* この取組を、他の取組につなげて活かそう (主なもの)

→ B1. 本人・家族の声を聴く	B4. ビジョン・共通方針	B5. 言葉・用語	B7. 仲間を増やす
→ A1. 広報・啓発	A2. 事前登録システム	A3. 個別支援ネットワーク	A4. 支援者登録システム
A6. SOSネットワーク	A7. 模擬訓練	A8. アフターサポートシステム	

A6. SOSネットワーク:SOS時にみんなで動く



内 容

- * 認知症の人等の行方不明が発覚した時（SOS時）に行方不明者（本人）を一刻も早く見つけるために関係者が協働して動くネットワークを予め形成しておき、いざという時に一緒に迅速に動いて早期発見に取り組みます。
- * SOSネットワークには、以下の機能を具体的に実践する体制作りが必要です。*右ページ図参照

①通報窓口：行方不明に気づいた家族等からのSOSの通報を受け、行方不明発覚時の状況等、早期発見に役立つ情報を迅速に把握・確認。

* 事前登録者の場合、登録情報をベースに。

②探索依頼体制：市町村（ネットワーク事務局）からネットワークの構成員等に、①で確認した情報を配信し、早期発見に向けた探索協力を依頼。

* 配信手段は地域で協議を（メール、FAX、防災無線等）

③探索体制：探索協力者が効率的・安全に探索活動を行いつつ早期発見にいたるよう、協力者の動きや発見に関する情報を経時的に収集し、探索方針を決定し、探索協力者や依頼先へ適時連絡（指示）。

なお、本人を発見・保護した直後からアフターサポートもSOSネットワークと連動させて検討しておくことが重要。
→p.46 A8. アフターサポートシステムを参照。

メリット・期待されること

- ◆ 行方不明が発生してから時間が経過するほど、発見率が落ち、死亡率や未発見率が高くなります。行方不明が発生してから家族や一部の人が慌てながら場当たり的に探すのではなく、地域の多様な関係者が連携・協働して効率的に探すためのSOSネットワークを予め整備しておくことは「早期に無事に発見する」ために極めて重要です。
- ◆ 年間約15,000人に上る行方不明が発生し、そしてそのうち500人近くの尊い命が失われている現状を開閉していくことが急務です。今のところ発生がない・少ない地域でも、発生する（場合によっては死亡者がでてしまう）リスクがあります。SOSネットワークを整備し、いざという時に確実に動けるように日頃から備えておくことは、すべての市区町村の最優先の課題のひとつです。
- ◆ SOSネットワークは、各市区町村で取り組まれているすべての認知症施策や取組の集大成ともいえるネットワークです。「救える命を守る」ためのSOSネットワークづくりは、当事者のためであることはもちろん、「他人事ではない切実な課題」解決にむけて、地域の多様な人たちが結集するインパクトのある取組であり、様々な認知症施策への波及効果や活性化・拡充の契機になります。

ステップ

1) 「いざという時」の流れのシミュレーションを

□ 自地域で「もし本人の行方不明に家族等が気づいた後どうなっていくか」、現状と課題、どのような流れと機能そして体制があったらいいか、以下の3点を中心に、関係者で具体的に話し合いアイデアを整理しながら、自地域ならではのSOSネットワークの流れ図を描こう。

①通報窓口：どこが窓口でどのような情報確認が必要か

②探索協力依頼：誰に向けて誰がどのような手段で連絡し探索の協力依頼をすることが現実的で効率的か

③探索体制：探索本部をどこに設置するといいか（場合分け）、状況判断や探索方針の話し合いや決定を誰が行うか、探索協力者への情報伝達や指示、探索協力者からの情報取集を誰がどのように行うことが現実的で効率的か、これらの役割分担等。

2) 必要な取決めや書式等の検討・整備

- ・ 要綱、フロー図、体制図、役割分担表、等
- ・ ネットワーク構成員名簿、連絡網（連絡手段明記）
- ・ フロー図にそって使用書類および手順書
- ・ 連絡窓口確認書、協力依頼文書、協解除文書等
- ・ 周知チラシ（対象別）

3) 説明・ネットワーク登録の促進、広報

4) 報告・共有、定期的な見直し（最低年に1回）

ポイント

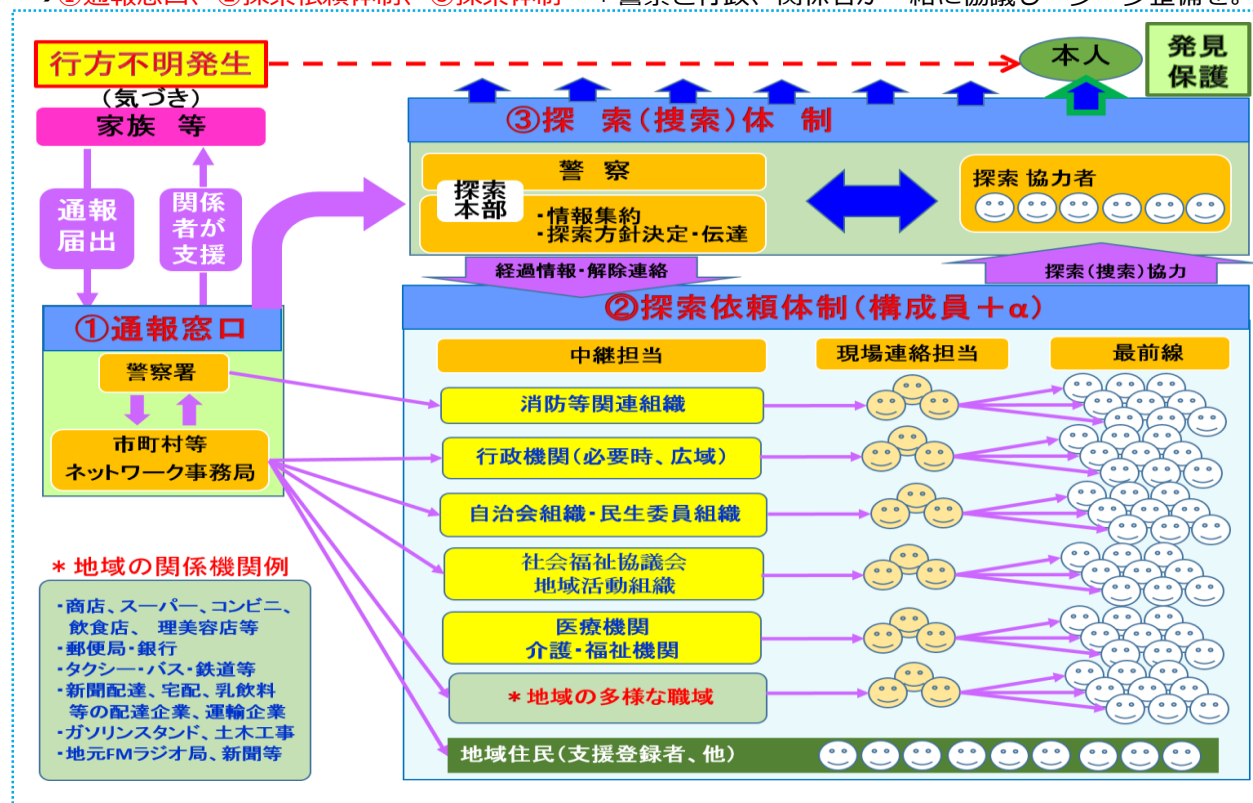
- ◆ 地元警察の担当者と話し合う機会を作り、警察側の行方不明者の届出受理、搜索開始から発見・搜索解除までの一連の流れや現状、工夫や苦慮して点についてよく聞こう。
→すでにある機能や書式等をベースに、相互の負担を減らしつつ、早期発見のために必要なことやできることを具体的に話し合おう。
- ◆ 漠然と話し合わず、地域に必ずいる行方不明の心配のある本人・家族の話を1ケースからでも関係者が一緒に、具体的な流れを話し合おう。
- ◆ 探索手段としてGPS機器の活用も今後有望だが、その場合も、「もしも」を想定して、左記の①～③に関して、自地域で必要な機能と体制づくり（基盤）が不可欠。その中でGPS機器を活用しよう。
- ◆ 重装備にしすぎず、優先的に必要なこと、できそうなことから少しずつ整備を進めていこう。
- ◆ 市町村全体ではなく、整備や稼働に前向きな小地域からまずは取組を進め、徐々に全地域に広げている市区町村もあり、現実的。
- ◆ 取決めや書式は、先行地域から提供してもらう場合も多いが、あくまでも雛形。関係者が一緒に自分たちが実際に使っていくためのものとして、自地域版をつくっていくことが、その後の普及や利用が（自発的に）広がる上で大切。

→ P.31～32 「A2. 事前登録システム」参照

参 考

SOSネットワークの全体像と必要な機能・体制

- * SOSネットワークは、警察と行政、そして地域の多様な人たちの協力によって成り立ちます。
 * 関係者の力を結集し、本人が一刻も早く発見されるためには、以下の3機能と体制の整備が必要です。
 →①通報窓口、②探索依頼体制、③探索体制 *警察と行政、関係者が一緒に協議し一步一步整備を。



実 例

市町村の認知症担当や警察、保健所の職員らがSOSネットワークについて継続的に討議 ～年々、整備・拡充を進める～ (京都府)

- * 市町村の担当者と所管の警察署員、圏域の保健所職員がグループを組み、SOSネットワークの先行地域の報告を参考に、自地域のSOSネットワークのあり方や拡充策を、検討する連絡会を毎年開催。
 * 同じテーブルについて、日頃積み残しの課題を語り合い、意見やアイデアを出し合いながら、年々、一步一步、自地域のSOSネットワークの構築・拡充を進めている。



模造紙を広げ、SOSネットワークの流れや課題、補強策を具体的に検討。新任者も多く、SOSネットワークが何をめざすのか、ねらいを共有しながら、行政関係者と警察署員との関係作りの機会にもなっている。



他市町村のSOSネットワークの構築状況や補強策の検討結果を聞く。自地域の今後の進め方のヒントが具体的に得られる。近隣市町村の動きを知る機会となり広域体制を築く契機にもなっている。

A6. SOSネットワーク

- B1. 本人・家族の声を聴く B4. ビジョン・共通方針 B5. 言葉・用語 B7. 仲間を増やす
- A1. 広報・啓発 A2. 事前登録システム A3. 個別支援ネットワーク A4. 支援者登録システム
- A5. 地域支援ネットワーク A7. 模擬訓練 A8. アフターサポートシステム



A7. 模擬訓練：備えて機動力を高める

内 容

- * 見守り・SOSネットワークの構成員や地域の人たちが、実際の行方不明発生時に上手く動けるように、実際に想定した場面を作り、模擬的に動いてみる体験をする訓練を行います。
- * 現在、各地で様々なテーマで模擬訓練が行われています。* 以上の全体、あるいは一部

例・家族等が本人の行方不明に気づいた後の警察への通報の仕方
 ・警察が通報を受けた後のネットワーク構成員への協力依頼の流れや方法
 ・構成員等の探索や発見時の声かけの方法
 ・発見後から探索本部までの流れや方法

- * 訓練後に振り返りを行うことが重要です。
【参加者一人ひとりが】 各自の認識や動きを点検しあい、実際の時によりよく行動できるための改善点を確認します。
【運営者と全員が】 想定している見守り・SOSネットワークの流れや方法で上手くいくかをみんなで点検し、実際の時にネットワークが上手く機能するよう改善点をみんなで考えます。

ステップ

- 1) テーマややり方を話し合っ一緒に決める**
 - 行方不明の心配のある本人や家族の声を聴きどんな場面での見守りやSOS時の対応をよりよくしてほしいか、話し合ってみよう。
 - 今実際地域の中で、見守りやSOS時の対応をしている（その可能性がある）人たちの声を聞き、今の時点で、まず何を強めていく必要があるか、話し合ってみよう。
 - 優先度や地域の関心が高テーマを絞る。
 * 詰め込みすぎず余裕のある時間配分を。
 - 訓練の実施地域や参加（予定）者を決める。
 - 当日の流れや訓練シナリオ、役割、手順書を作成。* 当日最後に、短時間でも振り返り会を。
- 2) 参加の呼びかけ、周知・広報を**
 - テーマやねらいに応じ、的を絞って丁寧に。
 - 訓練開催を理解を広げる機会として、メディア関係者への参加協力も検討しよう。
- 3) 当日～その後の運営：プロセスを記録に**
 - 当日の準備段階から訓練の実際、振り返り会の様子や得られた声を具体的に記録にとどめ、見直しや構成員・地域の人との共有を。
 - 振り返り会では、できるだけ多くの参加者がのびのびと発言できるように。

メリット・期待されること

- ◆ 見守り・SOSネットワークの流れや方法が形作られても、実際にうまく連絡が流れるか、また、早期に発見し本人の安心・安全を確保できるかは実際に試してみないとわかりません。
- ◆ ネットワークの構成員等が実際に近い場면을模した訓練を体験してみる（できたら体験を積み重ねる）ことで、いざという時に慌てずに適切に行動できるようになっていきます。また、認知症の人への理解をリアルに深める機会になります。
- ◆ 見守り・SOSネットワークを構成員らとともにによりよく具体的に改良していくことができます。
 * 構成員が異動していたり、連絡が届かない、連絡文がわかりにくい等が見つかることも。
- ◆ 通報時間や構成員への連絡時間、発見までに要する時間が短縮ができます。
 * 実際の場面に置き換えると本人の命の安全の確保、遠くまで行ってしまうことの防止等
- ◆ ネットワークに参加する多様な構成員同士が、一堂に会して一緒に動いてみることで、行方不明を防ぐことへの意識を高め、一体感が高まります。多様な立場の人と直に顔合わせ、立場や職種を超えた仲間づくりの絶好の機会になります。

ポイント

- ◆ 模擬訓練が、画一的になされたり、行事的にこなすものになってしまい、「誰のための何のためのものか」を見直す地域が増えている。
 * 模擬訓練は、本人が安心・安全に外出して無事に家に帰れるため、そのためのネットワークが上手く動けるよう実施することを確認しよう。
- ◆ 訓練も本人の視点、家族の視点にたって企画、実施しよう。模擬訓練は当日以上に企画が重要。
- ◆ 最初から大がかりにせず小規模からスタートを。無理のない範囲で準備を丁寧に進めよう。
- ◆ 地域の住民、専門職等が混じった実行委員会を作って話し合い、役割分担をしながら進めよう。
 * このプロセスがネットワークの強化になる。
- ◆ 見守りやSOS時に一緒に動いて欲しい人として、交通機関、子供や若い世代等に的を当てている地域もある。
- ◆ 参加しない人には伝わりにくい訓練の実際やそこで起きることを伝えるための映像記録の準備を。
 * 写真、ビデオなど、得意な人の力を借りよう。
- ◆ 振り返り会での参加者の声が、その後のネットワークづくりの重要な手がかりや呼び水になる。
- ◆ 振り返り会では、参加者や運営をした人の慰労や仲間作りの機会となるような楽しい時間に。

実例①

本人も、見守る側も切実な交通機関に焦点をあて、訓練を継続
～訓練の企画段階から一緒に取り組み、日常の見守り・支援に発展～

- * 日頃の相談例や地域の情報から、交通機関の人たちの認知症の人への理解と声かけや対応力の向上、地域包括支援センター等とのつながりの必要性を痛感。
- * 地元の私鉄やバス、タクシー等の会社に足を運び、現場の実情をよく聞きながら、認知症サポーター養成講座の開催とセットで模擬訓練の開催を提案。現場でよく起きている場面を盛り込んだ訓練シナリオを交通機関の人と一緒に作る。
- * 毎年やってみながら反響を記録に残し、工夫を重ねながら交通機関の人たちとの訓練を継続的に実施している。

災害やテロなどを想定して、様々な訓練を実施しているが、
「コミュニケーションがとりづらい方との訓練は初めてで
大変勉強になった。訓練の経験を新人教育に活用したい。」

【京都市地下鉄】

(京都市岩倉地域包括支援センター)



今年も訓練やりましょう!!
認知症の方の対応マニュアルを
作りました!!

【京都バス】

実例②

毎年一つの小地域に焦点を絞り、地域の人主体の訓練企画を立て
ながら、地元で即役立つ訓練を実施

(新潟県湯沢町)

- * 小規模な町だが、地域によって地域性や課題が異なる。
- * 毎年、一つの小地域でその地の住民、専門職に呼びかけて、4回シリーズで4回目に訓練を実施するアクションミーティング (p.23参照) を開催 (数か月をかけてじっくりと)。

<訓練前に考えたこと、地域の人たちと共有したこと>

～外出を見守れる町、安心安全な外出ができる町を目指して～

- * 特別な訓練では、実際の場面で役立つ。
- ⇒ 普段の生活の中で起きている内容についてよく知り、
みんなで話し合っ、無理のない方法を実施してみよう!
- * 周囲が大騒ぎしすぎて認知症の本人が、怖がって隠れてしまっていたことがあるよ。
- ⇒ 「本人だったらどうか…」、みんなが本人の立場になって考え、動くことを大事にしよう。
- * 一部の人だけでやっても、限界がある。
- ⇒ 訓練をきっかけに、一人でも多くの人たちに伝えよう。
やさしい理解者、支え手を一人ずつでも増やしていこう!
- * 訓練はあくまで手段。



その地の住民と専門職と一緒に、
何が必要か、どんな訓練だったら
役立つかアイデアを積み重ねる。

<本人や家族はどんな思いか、一人ひとりが自分事の訓練>



<振り返り会の声から新たなスタート>



A7. 模擬訓練

- B1. 本人・家族の声を聴く B4. ビジョン・共通方針 B5. 言葉・用語 B7. 仲間を増やす
- A1. 広報・啓発 A2. 事前登録システム A3. 個別支援ネットワーク A4. 支援者登録システム
- A6. SOSネットワーク A5. 地域支援ネットワーク A8. アフターサポートシステム



A8. アフターサポートシステム：本人・家族のダメージ緩和と再発防止

内 容

- * 行方不明となり、無事に発見・保護されることは、まずは一安心ではあるが、その一連の体験は本人、家族それぞれに大小様々なダメージをもたらしている。保護の適切な支援がないと、本人、家族ともに生活や心身状態が不安定になったり孤立が深まる、行方不明を繰り返す、在宅での生活継続が困難になり入所・入院にいたる人も少なくありません。
- * それらを食い止めるために、警察や関係者と連携しながら、保護直後の本人・家族らとつながりをつくり、ダメージの緩和や行方不明の再発防止など、必要な支援（アフターサポート）を行うことが非常に重要です。
- * 一方で、支援に入ることが困難であったり、多様な課題が複雑に絡みあい慎重かつ、長期的な支援が求められる場合もみられます。
- * いずれにしても、保護後の人が地域の中で安心・安全に暮らし続けていけるために、見守り・SOSネットワークの関係者らとのつながりも活かしながら支援していく体制づくりが求められています。

メリット・期待されること

- ◆ 必要なつながりや見守り、支援をつなぐことを通して、行方不明の再発防止につながります。
 - * 行方不明の体験を持つ人をしっかりとフォローすることが行方不明発生者を防ぐ一番の近道です。
- ◆ 市町村に事前登録の仕組みがあってもそれを利用していなかった場合には、保護後に丁寧に事前登録につなげることで、その後の継続的な見守りや支援の強化が図れ、再発防止に役立ちます。
- ◆ 警察との連携が、（これまで以上に）強まることが期待されます。
- ◆ 保護後の本人、家族の生活実態やニーズがブラックボックスの自治体が少なくなく、アフターサポートシステムを通じて、その現状や求めていることの具体的な把握と早期の対応が可能になります。
 - * 場合によっては潜在的な虐待なども

ステップ

1) 警察の担当者と話し合い連携を強化

- ☐ 市区町村を管轄する警察の担当者に話し合いの機会をもとう。
- ☐ 行方不明を繰り返している人や保護後が気にかかる人の存在や状況、課題について情報や意見交換を。
- ☐ 警察と行政、それぞれの立場を活かしてできることや、連携を強めていく必要性について相談し、情報共有や連携を具体的に強めていこう。

2) 保護後の「一人」から、フォローを丁寧に

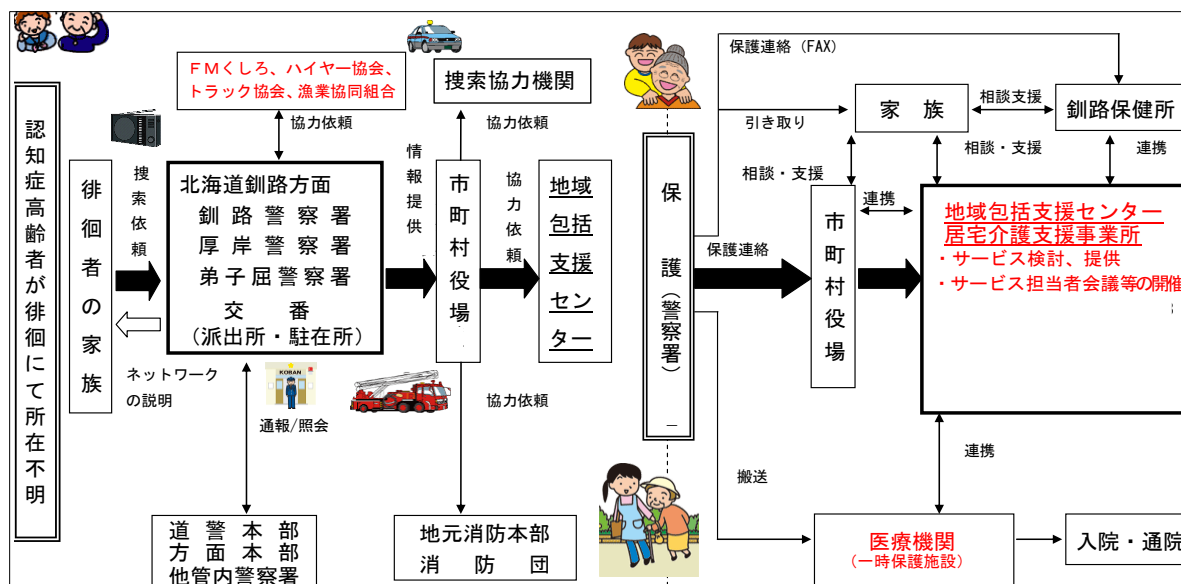
- ☐ 地域の関係者と、行方不明保護後の人の存在や状況について話し合ってみよう。
- ☐ 何らかの支援が必要と考えられる人や、現状が未把握な人と直接・間接的につながる工夫をし、見守りやSOS時の備えを検討しよう。
- ☐ 今後、地域で行方不明が新たに発生した場合できるだけ直後からの関わりや検討会を実施する流れをつくろう。

ポイント

- ◆ 警察の現場の人たちが、行方不明を繰り返す人の存在に気づき、課題と感じていたり、行政関係者との話し合いの必要性を感じている場合も少なくない。
- ◆ 働きかけが上手く進まない場合、都道府県に相談し、バックアップを得て警察との話し合いや連携が進むようになった地域もある。
- ◆ 行政担当者が警察に日常的に出向き、警察署員と関係を作り情報共有や連携を密にしている例も見られる。
- ◆ 地域包括支援センターやケアマネジャー、自治会関係者らの中では、警察に保護された人の存在を知っていても、行政担当者と情報共有や検討をしていない場合も少なくない。自地域の状況の確認を。
- ◆ 保護された人について市内の地域包括支援センターの月一の集まりで必ず話し合い、チームでの支援やフォローを定着させている地域もある。

発見・保護後を大切に。本人・家族のダメージを和らげ、地域で安心して暮らし続けられるための継続支援を丁寧。（北海道釧路市）

- * SOSネットワークが立ち上がった1994年当初より、本人・家族の声を重視し、発見・保護後のアフターサポートを丁寧に実施し、SOSネットワークのフロー図の中に明確に位置付けている。
- * 保護後の人が事前登録にしっかりと結びつくための支援の強化を新たにスタート（要綱も改訂）。



認知症高齢者等支援対象者情報提供制度を活かし、保護された人を警察と連携して支援 ～再発防止と暮らしの安心・安定へ～ （大阪府東大阪市）

- * 大阪府警では、「繰り返し行方不明となり発見・保護される人が多い」、「保護後、孤立していて地域や医療、相談窓口につながっていない場合が多い」という現場の経験を踏まえて、試行期間を経て平成29年から、警察で保護後に本人・家族の同意が得られた場合には、市町村に情報提供を行う制度をスタート（認知症高齢者等支援対象者情報提供制度）。
- * 東大阪市では、平成29年1月から同制度を導入。警察と協議を重ねながら、より効率的な支援の展開のために、管内警察からの情報提供は市を通さずに直接（委託）地域包括支援センターに届く流れを構築。行方不明の再発を防ぐなど、次々と支援・成果例が生まれている。

警察よりの情報提供：受理件数（平成29年）

	件数	内訳			
		布施	河内	枚岡	市外
1月	39	23	5	11	0
2月	34	20	8	5	1
3月	29	14	8	7	0
4月	36	20	6	9	1
5月	28	14	4	7	3
6月	29	16	6	5	2
計	195	107	37	44	7

- * 毎日のように情報提供がある。警察にはこんなにも情報があつた！→支援が必要なケースの情報を、警察と日常的にやりとりできるようになった。**

担当者の声

【地域包括支援センター職員】	【市職員】
○本人や家族が関わりを拒否していた事案も、警察が連携してくれたおかげで関わりをもつことができた。	○交通網の発達等により、高齢者が市外で保護されるケースが増えているため、この制度が全国的に拡がると良い。
○何度も警察に保護されていた事案に福祉・介護との連携を築き、認知症カフェへの参加に繋ぐなどして状態が安定し、保護される回数が減った。	○高齢者虐待や困難事例を把握する機会にもなる一方、対象者がセンター職員を受け入れてくれるかどうかは様々。
○管轄警察署との連携が一層強固なものになった。	この制度でのきっかけを活かし、拒否されても見放さずに、どう関わり続けるかの工夫検討も必要。

「認知症の人の行方不明や事故等の未然防止のための見守り体制構築に関する調査研究事業」報告会(2018年2月 東京センター) 資料より



A8. アフターサポートシステム

→ B2. 統計の整備・実態の把握と共有

→ B1. 本人・家族の声を聴く

B4. ビジョン・共通方針

B5. 言葉・用語

B7. 仲間を増やす

→ A1 広報・啓発

A2. 事前登録システム

A3. 個別支援ネットワーク

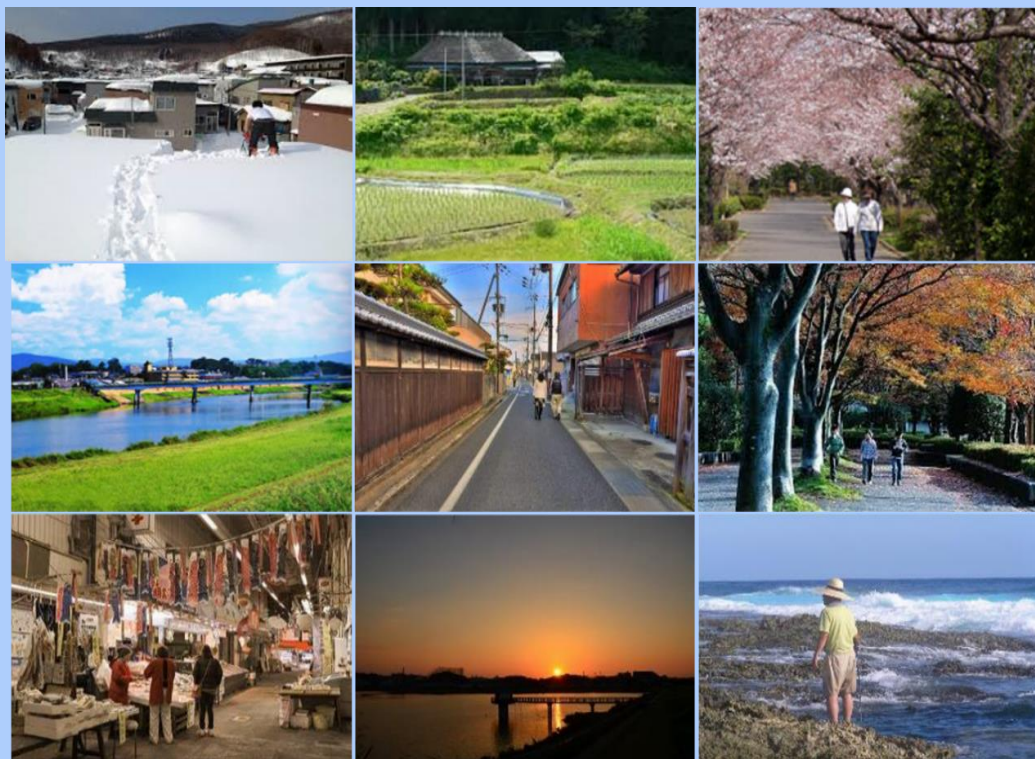
A4 支援者登録システム

A6. SOSネットワーク

A7. 模擬訓練

A5. 地域支援ネットワーク

自分が暮らし、働く地域を
安心して外出を楽しめ、無事にわが家に戻れるまちに



息の長い取り組みを、一步一步、地域とともに

認知症介護情報ネットワーク(DCネットワーク)から入手できます。
「見守り・SOS体制づくり基本パッケージ・ガイド」で検索

平成29年度厚生労働省老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業
認知症の人等の行方不明や事故等の未然防止のための見守り体制構築に関する調査研究事業
見守り・SOS体制づくり基本パッケージ～認知症の人等が行方不明にならずに外出を続けられる
ための見守り・SOS体制づくりの一步一步～

発行：社会福祉法人 浴風会 認知症介護研究・研修東京センター
東京都杉並区高井戸西1-12-1
電話：03-3334-2173（代表）